

オリゲネス 『エレミヤ書説教』 のギリシア語原典 とヒエロニムスによるラテン語訳の日本語対訳： 第2、第4、第8説教

加藤，哲平
九州大学大学院言語文化研究院：助教

<https://doi.org/10.15017/7318915>

出版情報：言語文化論究. 53, pp.87-118, 2024-11-05. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



オリゲネス『エレミヤ書説教』のギリシア語原典と ヒエロニウムスによるラテン語訳の日本語対訳： 第2、第4、第8説教

加 藤 哲 平

本説教の緒論や翻訳の凡例については、加藤哲平「オリゲネス『エレミヤ書説教』のギリシア語原典とヒエロニウムスによるラテン語訳の日本語対訳：第1説教」『言語文化論究』第52号、2024年、125-53頁を参照されたい。

第2説教（エレ2:21-22）＝ラテン語訳の第13説教

解説

第2説教は、エレ2:21-22を題材とした短い一作である（全3節）。第1節では、「良い葡萄」が「苦さへと向きを変えた」というエレミヤ書の記述が、人間の罪に関する創世記の記述をもとに解釈される。第2節では、「ソーダ」や「灰汁」では清められない、魂を汚すような罪を清めるためには、イザヤ書にある「裁きの霊」と「焼き尽くす霊」が必要であることが述べられる。第3節では、イエスが「聖霊」で洗礼を施す人と、「火」で洗礼を施す人がいることが説明された後、祈りによって説教が締め括られる。

この第2説教に関しては、ギリシア語原典とラテン語訳を詳細に比較した先行研究として、Theodore A. Bergren らの論文がある¹。それによると、ヒエロニウムスのラテン語訳の印象は「極めて非逐語的かつ自由」であり、その特徴としては、ギリシア語テキストの「濃縮」、「拡張」、「変容」、「保持」の四つが挙げられるという。第一に、テキストを「濃縮」している例としては、第2節の次の箇所がある。

καὶ ὥσπερ τῶν τραυμάτων τινὰ ἐστὶν ἃ μαλάγματι
θεραπεύεται, καὶ ἄλλα ἐλαίῳ θεραπεύεται, καὶ ἄλλα
δεῖται καταδέσμου καὶ οὕτως ὑγιάζεται ...

また、ちょうど傷のうちには湿布によって癒されるものもあり、またむしろオリーブ油によって癒されるものもあり、またむしろ包帯を必要とし、それによって治癒されるものもあるが……

et quomodo sunt quaedam vulnera quae malagma-
tibus, et oleo, et alligaturis redduntur pristinae
sanitati ...

また、ちょうど湿布やオリーブ油や包帯によってかつての健康に戻される何らかの傷があるように……

ギリシア語では「湿布」、「オリーブ油」、「包帯」のそれぞれに動詞が与えられているのに対し、ラテン語訳では一つの動詞にまとめられることで、テキストが「濃縮」されている。

第二に、テキストの意味を修正したり、新しい要素を導入したりすることで、テキストを「拡張」している例としては、第3節の次の箇所がある。

διὰ τοῦτο τούτων λεγομένων, ὅση δύναμις
συναγαγόντες τοὺς λόγους τοὺς τῶν γραφῶν ...

このことゆえに、これらのことが言われている
ので、聖書の言葉を可能な限り集めながら……

quamobrem cum talia post mortem nobis residere
videamus, Scripturas diligenter simul recitantes
...

このことゆえに、死んだ後にはこれらのことが
私たちに残っていることを私たちは見ているの
で、聖書を注意深く一緒に朗読しながら……

簡潔に「これらのことが言われているので」とあるギリシア語と比べて、ラテン語訳ではヒエロニムスによる釈義的「拡張」がなされているのが見て取れる。

第三に、イデオロギー、文体上の配慮、あるいは誤解によって、時にテキストの意味を「変容」させている例としては、第2節の次の箇所がある。

ἄρα ὥετό τις ἀμαρτήσασα ψυχὴ νίτρον λαβοῦσα καὶ
ἀποπλυναμένη νίτρῳ αἰσθητῶ, ὅτι παύεται τῆς
κηλίδος καὶ παύεται τῆς ἀμαρτίας;

いったい、罪を犯したある魂が、ソーダを取り、
知覚できるソーダで自らを洗うときに、穢れを
止めたり罪を止めたりできるなどと考えるで
しょうか。

ergone hoc arbitrandum est, quia anima peccatrix
nitro conata sit purgare maculas suas ...

それでは、罪を犯した魂が、ソーダで自らの穢
れを清めようとして……いるとは考えられない
のでしょうか。

未完了過去の中動態である「彼は考えていた」(ὥετο) という語が、ラテン語訳では迂言的用法の受動態である「考えられるべきである」(arbitrandum est) になっており、ヒエロニムスが意味論的な同質性を保ちつつ、同時にこの一節の基本的な意味を「変容」させているのが分かる。

最後に、逐語的な翻訳ではないが、テキストの基本的な意味を「保持」している例としては、第1節の次の箇所がある。

εἴ τι οὖν ἄριστον περὶ ἡμᾶς, ὁ θεὸς πεποίηκεν, ἡμεῖς
δὲ ἑαυτοῖς ἐκτίσαμεν τὴν κακίαν καὶ τὰς ἀμαρτίας.

もし私たちに関して何か非常に優れたものがあ
るとすれば、神がそれを作りました。一方で、
私たちときたら、自分たちで悪徳と罪を創り出
してしまいました。

omnia igitur bona in nobis et propter nos condidit
Deus, sed nosmetipsi malitiam atque peccata pro-
pria in nobis attraximus voluntate.

それゆえに、私たちの中にある、また私たちの
近くにあるあらゆる善いものは、神が作りまし
た。一方で、私たちときたら、自分たちの意志
で悪徳と固有の罪を引き寄せてしまいました。

前半部分に関して、ラテン語訳は、ギリシア語の条件文を組み替えて自由に翻訳しているが(条件

節だったところを名詞節に変え、それを帰結節だったところの目的語にしている)、その基本的な意味は「保持」している。

以上のような Bergren の分析によれば、ヒエロニムスは説教の釈義的な部分の翻訳に際して、ほとんど思うままにテキストを言い換えたり、再編成したり、拡大したり、切り詰めたり、文体的に変えたりしていたと評価される。同様の評価を他の説教についても適用できるのかどうかについては、これからの研究が俟たれるところである。

翻訳

「どのようにしてあなたは苦さへと向きを変えたのか、よその葡萄よ」について。「たとえあなたがソーダで身を洗い、灰汁で自らを清めても、あなたは私の前であなたの過ちの中で穢れがついたままである、と主は言う」まで。

第1節

(ギリシア語)

「神は死を作らず、生きているものの滅びについて喜ばない。というのも、彼は万物が存在するためにそれらを創造し、世の被造物は救いとなるものであり、それらの中には滅びの毒はなく、陰府の支配は地上に及ばないからである」(ソロ知恵 1:13以下)。次に、わずかな節を越えつつ、私は、いったいどこから死はやって来たのかを言います。「悪魔の妬みによって、死はこの世にやって来た」(ソロ知恵 2:24)。もし私たちに何かが非常に優れたものがあるとすれば、神がそれを作りました。一方で、私たちときたら、自分たちで悪徳と罪を創り出してしまいました。このことゆえに、ここで預言者において読まれた箇所冒頭は、次のように疑問形で、神が魂のために整えた甘さとは反対に、魂の中に苦さを持った者たちに言ったのです、「どのようにしてあなたは苦さへと向きを変えたのか、よその葡萄よ」(エレ 2:21) と。これはいわば次のように言ったのです、「神は足の不自由さを作ったのではなく、あらゆる足の速さを作ったが、では〈どんな〉理由が足の不自由な人たちの足を不自由にさせたのだろうか。神は五体全体を完全に健康にしたが、どんな理由が誰かを苦しい目に遭わせるのだろうか」と。同じようなやり方で、最初の人間の魂だけが「像に従って」生じたのではなく、すべての人間の魂もそ

(ラテン語訳)

「神は死を作らず、生きているものの滅びについて喜ばない。というのも、彼は万物が存在するためにそれらを創造し、世の被造物は救いとなるものであり、それらの中には死の毒はなく、陰府の支配は地上に及ばないからである」(ソロ知恵 1:13以下)。次に、わずかに進んで、私は、いったいどこから死がくるのかを見つけます。「悪魔の妬みによって、死は世界にやって来た」(ソロ知恵 2:24)。それゆえに、私たちの中には、神が作りました。一方で、私たちときたら、自分たちの意志で悪徳と固有の罪を引き寄せてしまいました。このことゆえに、目下の一節においても、預言者を通じて、今や神は不平を言い、また幾分疑念を抱きながら尋ねたのです、どのようにして、神自身が甘いものとして作った魂が何かによって苦いものとなったのか、と。そして言ったのです、「どのようにしてあなたは苦さへと向きを変えたのか、よその葡萄よ」(エレ 2:21) と。彼が言ったのは次のようなことです、「私は、死すべき種族が歩くための足を作ったが、ではどんな理由で多くの者たちの足が不自由であることが起きたのだろうか。私は五体全体を強く健康にしたが、どのようにして私は多くの者たちに弱さと無力さを見るのだろうか」と。このようにして、最初の人間の魂だけでな

うなりました。というのも、「私たちは人間を私たちの像や似姿に従って作ろう」(創 1:26)は、すべての人間たちに該当するからです。そしてちょうどアダムに関して、彼が罪ゆえに「土でできたものの像を」(I コリ 15:49) 持っていたときに、多くの者たちが「像に従って」いると考えているものが、それに重ねられているものに先立つように、すべての者たちに関して、神の「像に従って」いるものは、より悪いものに先立っているのです。罪人であるときには、「私たちは土でできたものの像を持っていたが」、悔い改めたあとには、「私たちは天上にある方の像を持つようになるだろう」(I コリ 15:49)。いづれにせよ、創造は天上にある方の像において起きたのです。

したがって、ここで罪を犯した者たちに対して、御言葉「ロゴス」は、咎めるように困って言いました。「どのようにしてあなたは苦さへと向きを変えたのか、よその葡萄よ」。というのも、「私はあなたを実りの多い、全体的に真正な葡萄として植えた」(エレ 2:21) からです。これらより前に言われていることなのですが——そして「それを」短く繰り返して、私はあなたがたを納得させましょう——、神は人間の魂を良い葡萄として植えましたが、それぞれ「の魂」は創造者の意図とは反対に向きを変えてしまったのです。「私はあなたを实りの多い、全体的に」、部分的にではなく、「真正な」、あるときは真正で別のときは偽りなのではない、「葡萄として植えた」。むしろ、「私はあなたを実りの多い、全体的に真正な葡萄として植えた。どのようにしてあなたは向きを変えたのか」、私はあなたを全体的に真正な葡萄として創造したのに、あなたは「どのようにして苦さへと向きを変えたのか」、そして「どのようにして」よその葡萄になったのですか。

第2節

(ギリシア語)

これらのあとで、「たとえあなたがソーダで身

く、すべての人間の魂も「神の像や似姿に従って」(創 1:26) 作られました。そして、神のものであるところのこの像は、私たちが後に罪ゆえに自分たちに着せた悪魔の像よりも古いのです。そのために、私たちは大いに働かなければなりません。その結果、誤っているときには、私たちは地の像を運ぶように、悔い改めに向けて向きを変えたあとには、天の像を運ばなければなりませんでした (I コリ 15:49)。それに向けて、あらゆる被造物もまた最初に作り上げられました。

その悪への転回ゆえに、今や罪人たちを、御言葉は、非難して言いました、「どのようにしてあなたは苦さへと向きを変えたのか、よその葡萄よ。私はそれを実りの多い、全体的に真正なものとして植えた」(エレ 2:21)。前にも私たちは言いましたが、今も同じことをより十全に、あなたがたが理解できるように、私たちは繰り返します。すなわち、神は人間の魂を良いものとして植えましたが、魂そのものは自らの悪徳ゆえに創造者の意図とは反対に歪められてしまったのです。「私はあなたを実りの多い、全体的に真正な葡萄として植えた」のです。部分的に真正だったり部分的に虚偽だったりしたものとして私は「あなたを」植えたのではなく、全体的に真正なものとして「植えたのです」。私の植え付けに反して、あなたは「どのようにして苦さへと向きを変えたのか」、そして「どのようにして」よその葡萄になったのですか。

(ラテン語訳)

これらのあとで、「たとえあなたがソーダで身

を洗い、灰汁で自らを清めても、あなたは私の前であなたの過ちの中で穢れがついたままである、と主は言う」(エレ 2:22) を見てみましょう。いったい、罪を犯したある魂が、ソーダを取り、知覚できる〔実物の〕ソーダで自らを洗うときに、〔魂の〕穢れを止めたり罪を止めたりできるなどと考えるでしょうか。一方で、地から生じたその灰汁を取って、身を洗い、自らを拭き清めたときに、いったい誰が、魂が清められたなどと思うのでしょうか。というのも、ここで御言葉「ロゴス」は、苦さへと向きを変え、またよその葡萄になった者に対し、「たとえあなたがソーダで身を洗い、灰汁で自らを清めても、あなたは私の前であなたの過ちの中で穢れがついたままである、と主は言う」(エレ 2:22) と言っています。しかし、知るべきは、御言葉があらゆる力を持っていることであり、そして「また知るべきは、」聖書全体の力を持っているように、御言葉があらゆる魔法薬の力を持っており、またそれはあらゆる洗浄者のうちで最も強く清める力でもあるということです。「というのも、神の言葉は生きており、活動的であり、あらゆる諸刃の剣よりも鋭いからである」(ヘブ 4:12)。そして必要としていることのうち、あなたが言うことは何でも、御言葉の力の中にあるのです。

さて、ソーダというある御言葉と、灰汁というある御言葉があり、それらはどれも語られることによって、そうした汚れを清めてくれます。しかし、ソーダであるこのような御言葉によって、また灰汁であるこのような御言葉によって、すべての罪が癒されるわけではないため、それどころかソーダも灰汁も必要としない罪があるため、ソーダや灰汁で洗われることができるものとして持っている人と人が思う罪に関連して、次のように言われているのです。「たとえあなたがソーダで身を洗い、灰汁で自らを清めても、あなたは私の前であなたの過ちの中で穢れがついたままである、と主は言う」(エレ 2:22)。また、ちょうど傷のうちには湿布によって癒されるものもあり、またむしろオリーブ油によって

を洗い、自らのために植物の灰汁を増やしても、あなたは私の視界においてあなたの不当さの中で穢れがついたままである、と主は言う」(エレ 2:22) と続きます。それでは、罪を犯した魂が、ソーダで自らの穢れを清めようとしており、また地から生じた灰汁を取って、過ちの不潔さを自分自身から清めようと努めているとは考えられないのでしょうか。そこから今や、神の言葉はそれ「魂」に向かって、「たとえあなたがソーダで身を洗い、自らのために植物の灰汁を増やしても、あなたは私の視界においてあなたの不当さの中で穢れがついたままである、と主は言う」(エレ 2:22) と言っています。あるいは、確かにより正しく考えられるべきは、聖なる巻物があらゆる力に満ちているように、神の言葉もまたあらゆる力に満ちていることであり、そして「また考えられるべきは、」過ちを清めることのできる、また汚れを落とすことによって往時の美しさへと戻ることのできる、そのような強さを持っていることなののでしょうか。「というのも、神の言葉は生きており、活動的であり、あらゆる諸刃の剣よりも鋭いからである」(ヘブ 4:12)。

これらのことから私たちが述べたのは、霊の苦難のために御言葉が治療薬を持っており、その中にはソーダがあり、灰汁があり、それらによって汚れが洗い清められるということでした。しかし、すべての罪が御言葉のソーダや灰汁によって清められることができるわけではありませんし、それどころか迅速な治療を必要としない別の罪もあれば、ソーダや灰汁に従って清めるだけでは済まない別の罪もあります。そのため、次のように言われているのです。「たとえあなたがソーダで身を洗い、自らのために植物の灰汁を増やしても、あなたは私の視界においてあなたの不当さの中で穢れがついたままである、と主は言う」(エレ 2:22)。また、ちょうど湿布やオリーブ油や包帯によってかつての健康に戻される何らかの傷があるように、一方でそのようなものとは別のものもあり、それらについて

癒されるものもあり、またむしろ包帯を必要とし、それによって治癒されるものもあるが、一方で「つけるべき湿布はなく、オリーブ油も包帯もない。それどころか、あなたがたの地は荒れ果て、あなたがたの町は火で焼かれる」(イザ 1:6以下)と言われるような傷もあるように、魂を汚す何らかの罪もあります。そして人はそれらの罪のために、御言葉というソーダを、御言葉という灰汁を必要とするのです。一方で、このようには癒され得ないような何らかの罪もあります。というのも、それは汚れに喩えられないからです。このことゆえに、諸々の罪の違いを理解した上で、イザヤにおいて主がどのように語っているかを見てください。「主はシオンの息子たちや娘たちの汚れを洗い清め、裁きの霊と焼き尽くす霊によって彼らの真ん中から血を清める」(イザ 4:4)。汚れと血〔とあるのは〕、汚れを裁きの〈霊で〉、血を焼き尽くす霊で〔清めるということです〕。もしあなたが「死に至る」(Iヨハ 5:16以下) 罪を犯して〈いなくて〉も、いずれにせよあなたは罪を犯したのであり、汚れてしまっているのです。したがって、「主はシオンの息子たちや娘たちの汚れを洗い清め、彼らの真ん中から血を清める」のであり、それから「裁きの霊による」「汚れ」に対する報い〈と、「焼き尽くす霊による」「血」に対する「報い」が「あるのです」(イザ 4:4)。そして多くの者たちは、よりひどく罪を犯すときはいつも、ソーダや灰汁によってではなく、焼き尽くす霊によって清められることを必要としているのです。

第3節

(ギリシア語)

このことゆえに、イエスは——おそらく今私はその理由を見つけたわけですが——「聖霊と火で」(ルカ 3:16) 洗礼を授けるのです。それも、同じ者に「聖霊と火で」〔洗礼を授ける〕ではありません。そうではなく、聖者には聖霊で〔洗礼を授けますが〕、別の者には、彼が信じ

は「つけるべき湿布はなく、オリーブ油も包帯もない。それどころか、あなたがたの地は荒れ果て、あなたがたの町は火で焼かれる」(イザ 1:6以下)と言われているように、魂を汚す何らかの罪もあります。そして〔その罪は〕御言葉という灰汁を、御言葉というソーダを持つ人を必要とするのです。一方で、先に述べた御言葉の力によっては癒され得ないような別のものもあります。というのも、それは汚れに喩えられないからです。このことゆえに、諸々の罪の違いを理解した上で、イザヤを通じて主は次のように語っています。「主はシオンの息子たちの汚れを血で洗い清め、裁きの霊と焼き尽くす霊によって彼らの真ん中から汚れと血を清めるだろう」(イザ 4:4)。汚れを裁きの霊で、血を焼き尽くす霊で〔清めるということです〕。もしあなたが罪を犯し、諸々の罪の汚れで汚されているなら、主はシオンの息子たちと娘たちの汚れを洗い清め、彼らの真ん中から血を清めるのです。しかし、もし「死に至る」(Iヨハ 5:16以下) 罪があるなら、私たちはソーダや灰汁によってではなく、裁きの霊、焼尽と罰の霊によって清められることができます。

(ラテン語訳)

おそらく、イエスもまた「聖霊と火で」(ルカ 3:16) 洗礼を授けるのです。それも、同じ者に「聖霊と火で」洗礼を授けるものではありません。そうではなく、聖者は聖霊で洗礼を授けられ、また信仰と神の教えの後に再び悪へと向いた者は、火の拷問で清められなければならないので

た後に、彼が聖霊に値すると見なされた後に、再び罪を犯したとき、彼〔イエス〕は〔その者を〕火で洗うのです。それは、同じ者がイエスによって「聖霊と火で」洗礼を授けられることのないようにするためです。そこで幸いなのは、聖霊で洗礼を授けられた者であり、火で洗礼を授けられる必要がなかった者です。一方で、三度不幸なのは、火で洗礼を授けられる必要があった者です。いずれにせよ、両者をイエスは守ってくれます。というのも、「エッサイの根から若枝が出てきて、その根から花が上る」（イザ11:1）からです。若枝は罰される者たちのためのもの、花は義人たちのもの、です。このように、「神は焼き尽くす火」（ヘブ12:29、申4:24、9:3）であり、また「神は光である」（Iヨハ1:5）のです。焼き尽くす火は罪人たちのためのもの、光は義人たちや聖者たちのためのものです。そして「幸いなのは、第一の復活の中に割り当てを得る者」（黙20:6）であり、聖霊の洗礼を守った者です。別の復活で救われる者とは誰でしょう。それは、火によって洗礼を授けられる必要があった者です、かの火のところにその者が来たときに、またその火が彼を試したときに（Iコリ3:13）、またかの火が焼き尽くすために、木、干し草、藁を見つけたときに（Iコリ3:12）。

このことゆえに、これらのことが言われているので、聖書の言葉を可能な限り集めながら、それらを心の中へとしましましょう。そしてそれらに従って生きようと試みましょう、もし〔この世からの〕出発の前に清浄になることができるなら、そして〔もし〕出発のために私たちの仕事を準備し、出て行った後に、善き者たちの間で受け入れられ、キリスト・イエス——「この御方に栄光と支配が永遠のうちの永遠の中にある」（Iペト4:11）——において救われること〔ができるなら〕。アーメン。

す。幸いなのは、聖霊の洗礼を受け取った者であり、火の洗礼を必要としなかった者です。一方で、不幸であり、すべての悲しみに値するのは、霊の洗礼の後に火で洗礼を授けられる必要があった者です。たとえ二つ〔聖霊と火〕のうちの一つに関してでも、イエスは洗礼を与えてくれます。「エッセイの根から若枝が出てきて、その根から花が上る」（イザ11:1）のです。若枝は罰される者たちのためのもの、花は義人たちのものです。このように、「神は焼き尽くす火」（ヘブ12:29、申4:24、9:3）でもあり、また「光」（Iヨハ1:5）でもあると、聖書で言われています。火は罪人たちのためのもの、光は聖者たちのためのものです。そして「幸いなのは、第一の復活の中に割り当てを得る者」（黙20:6）です。もし誰かが聖霊の洗礼を守ったなら、その者は第一の復活の割り当ての中で〔それを〕共有します。しかし、もし誰かが第二の復活において救われるなら、その者は罪人です。すなわち、火の洗礼を必要とし、焼尽によって清められる者です。それは、彼が持つ木、干し草、藁の何でも、火が焼き尽くすためにです（Iコリ3:12）。

このことゆえに、死んだ後にはこれらのことが私たちに残っていることを私たちは見ているので、聖書を注意深く一緒に朗読しながら、それらを私たちの心の中に蓄えておきましょう。そしてそれらの教えに従って生きようと試みましょう。それは、〔この世からの〕出発の日の前に、もし可能なら、罪の汚れから清浄にされた上で、聖者たちの間で受け入れられることができるようになるためです、キリスト・イエス——「この御方に栄光と支配が永遠のうちの永遠の中にある」（Iペト4:11）——において。アーメン。

第4説教（エレ3:6-11）＝ラテン語訳の第14説教

解説

第4説教は、エレ3:6-11を題材とした中編である（全6節）。第1節では、イスラエル王国とユダ王国が分裂した経緯の説明の後、先に神に対して反逆したイスラエルよりも、その前例から学ばずに後から反逆したユダの方が罪深いことが論じられる。第2節では、イスラエルとユダの関係が、ユダヤ人と異邦人キリスト者の関係に対比されつつ、そこからユダヤ人の「墮落」と、それに伴う「異邦人の招き」というパウロの神学が展開される。第3節では、イエスが危惧したような教会の危機がオリゲネスの時代に現実化していることが指摘される。第4節では、神が「恵み深さ」と「厳しさ」を併せ持つこと、イスラエルの言葉が「実をつけない」「生い茂る」だけの木に等しいことなどが述べられる。第5節では、イスラエル（ユダヤ人）とユダ（キリスト者）の関係が奴隷のたとえから説明される。そして第6節では、神に対して真に立ち帰るためにすべきことが列挙され、またそうすることで諸民族のみならずユダヤ人もまた救われることが指摘された後、祈りによって説教が締め括られる。

翻訳

「そしてヨシヤ王の日々に、主は私に言った」について。「不実なユダのゆえに、イスラエルはその魂を義とした」まで。

第1節

（ギリシア語）

朗読された本文の言葉そのものは何か不明なところを持っており、まさにそのことが最初に理解されなければなりません。そしてその後で、もし神が許して下さるなら、私たちはかの御方の神秘的な計画を知ることでしょう。かの御方は私たちがこれらの中に次のことを知るように望んでくいません。すなわち、諸王国〔列王記〕において書かれているように（王上12:1-20）、レハブアムの時代には、民はヤロブアムの下で十の部族の王国に、またレハブアムの下で二つの部族の〔王国〕に分けられていました。そしてヤロブアムの下にある者たちはイスラエルと呼ばれ、レハブアムの下にある者たちはユダ〔と呼ばれました〕。そして民の区分そのものは、歴史によれば、今に至るまで残ったままです。というのも、イスラエルとユダを「同じものへ」（エレ3:18）まとめるような歴史など、私たちは知らないからです。そのとき、まずヤロブアムと彼の後継者たちの下にあるイスラエ

（ラテン語訳）

不明なところのある本文の朗読の冒頭そのものを、私たちは詳しく調べなければなりません。そしてその後で、もし神が理解の方法を与えて下さるなら、私たちはより高度な意味へと行かなければなりません。諸王国の書〔列王記〕には歴史が語られています。それが教えているところでは（王上12:1-20）、ソロモンの死後、レハブアムの時代に、十二の部族が分けられていました。すなわち、ヤロブアムは十の部族を支配し、それらはイスラエルと呼ばれました。一方で、レハブアムは二つの部族を統轄し、それらはユダと呼ばれました。それらの民の区分は、書物の証拠によれば、今日に至るまで残ったままです。というのも、ある諸々の書物には、どこでイスラエルとユダが再び一つの帝国の支配下に置かれるのかが見出されないからです。したがって、まずヤロブアムとその他の彼の後継者たちの下にあるイスラエルが罪を犯したのであり、またどれほど罪を犯したかという、神

ルが非常に多く罪を犯したのであり、またユダよりどれほど罪を犯したかというと、聖書が述べるように（王下17:23）、彼らが今日までアッシリアに対する捕虜となるように摂理によって有罪判決を受けたほどでした。このことの後で、ユダの子らも罪を犯し、バビロニアに対する捕虜として有罪判決を受けました。それはイスラエルのように今日に至るまでではなく、70年間のことで、このことについてエレミヤは預言し（エレ25:11）、ダニエルも言及しました（ダニ9:2）。もし私たちが当時のその民に関してこれらのことを理解しているなら、〔今度は〕預言者のいくつかの節が何か次のようなことを明らかにしないかどうかを見てください。というのも、御言葉〔ロゴス〕がイスラエルの罪を告発して述べているところでは、それほど大きな罪がイスラエルに生じた後で、ユダの会衆は、かの者たちの過失を聞き及んでいたにもかかわらず、またどんな方法で私が彼らを捕囚に陥らせたのかを聞き及んでいたにもかかわらず、〔彼らは〕教え諭されず、それどころか〔自分たちの〕罪に〔新たな罪を〕増し加えたのであり、その結果、その付加ゆえに、彼らの罪がイスラエルの罪と比較されたとき、ユダよりイスラエルに義が見出されたのです（エレ3:6-11）。それから預言者は、彼らについて、ユダがイスラエルより悪いと預言するように命じられましたが、それはユダが罪の後に立ち帰るためでした（エレ3:12-14）。そしてイスラエルに対して立ち帰ることを命じる預言の後で、預言者は、イスラエルとユダは共にあり、そのとき両者から一つの王国が生じることになると預言しました（エレ3:18）。さて、ここで、朗読された諸々のことを顧みる必要があります。〔人は〕今日のすべての朗読の言葉を取り、そこで意味が明らかにされるように心がけなければなりません。

「そしてヨシヤ王の日々に、主は私に言った、あなたはイスラエルの家が私にしたことを見たか」。ユダではなく、イスラエルの〔家〕が先になっています。〔彼女〔イスラエル〕はすべての

によって捕囚に引き渡され、今日までアッシリア人たちに隷属するほどでした（王下17:23）。ユダもまた罪を犯し、バビロニア人たちに引き渡されました。それは今日に至るまでではなく、聖書が証言するように、70年間のことで、このことについてエレミヤは預言し（エレ25:11）、ダニエルも〔預言しました〕（ダニ9:2）。もしあなたが諸王国の書に書かれている歴史を理解したなら、〔今度は〕預言者の言葉をよく調べてみてください。そうすれば、同じ意味が表現されているのを見ることでしょう。イスラエルは告発されており、次のように言われています。すなわち、ユダの会衆は、イスラエルが自らの罪ゆえに捕囚に引き渡されたことを聞き及んでいたにもかかわらず、悔い改めを行うこともなく、私に向くこともなく、それどころかこれほどまでに〔新たな〕罪を〔自分たちの〕罪に重ねました。それがどれほどかというと、その罪の比較に関して、イスラエルがより正しいと明らかになるほどでした（エレ3:6-11）。それから預言者は、イスラエルに対して、次のように預言するように命じられました。すなわち、ユダはそれ〔イスラエル〕より悪くなり、〔しかし〕主へと向けられたので、イスラエルもユダも一つの王国のものに置かれることになるであろうし、またかつての調和へと戻ることになるであろう、と。このことがより明確になるために、聖書そのものの言葉が差し出されるべきです。

「そしてヨシヤ王の日々に、主は私に言った、あなたはイスラエルの家の住処が私にしたことを見たか」。ユダではなく、先にイスラエルと言っています。〔彼女〔イスラエル〕はすべての高い山の下に、またすべての生い茂る木の下に去り、そこで淫行に耽った。そして彼女が淫行に耽った後、私はこれらすべてのことを言った、『私のもとへと帰ってきなさい』と。しかし、彼女は帰ってこなかった。そして不実なユダは彼女の〕、すなわちイスラエルの人々の「不実を見た。そして彼ら」、すなわちユダ出身の者たち「が見たのは、イスラエルの住処が姦淫したこと

高い山の上に、またすべての生い茂る木の下に行き、〈そこで〉淫行に耽った。そして彼女が淫行に耽った後、私はこれらすべてのことを言った、『私のもとへと帰ってきなさい』と。〈しかし、彼女は帰ってこなかった。〉そして不実なユダは彼女の、つまりイスラエルの会衆の「不実を見た。そして彼ら」、つまりユダ出身の者たち「が見たのは、イスラエルの家が姦淫したことゆえに見捨てられたことすべてについてでした。そこで私は彼女を追いやり、彼女に離縁状を渡した」(エレ 3:6-8)。ユダは教え諭されなければなりません——なぜなら、私はイスラエルを、イスラエルの会衆を追いやり、彼らをアッシリア人たちに投げ捨てたからです。「そして私は彼女に、彼女の手もとに、離縁状を渡した」——「しかし、不実なユダは恐れなかった」(エレ 3:8)。彼〔神〕がイスラエルにしたそうした諸々のことの後、つまりイスラエルを追いやり、離縁状を渡した後、ユダの会衆は、かの者たち〔イスラエル〕が経験した苦難から教え諭されなければならなかったのです。ところが彼らは教え諭されなかったばかりか、〔自分たちの〕罪に〔新たな罪を〕増し加えました。その結果、イスラエルの会衆の罪は、ユダの会衆の罪と比較して、正義であるように思えます。「そして私は彼女に、彼女の手もとに、離縁状を渡した。しかし、不実なユダ」、つまり彼女〔イスラエル〕の姉妹「は恐れなかった。そして彼女は行って、自分自身もまた淫行に耽った。そしてその淫行は彼女の無〔に等しいもの〕となった。そして彼女は木や石と姦淫した。そしてこれらすべてにおいて、不実なユダは、彼女の心の全体から私へと立ち帰ることはなく、偽って」(エレ 3:8-10) 私へと立ち帰ったのでした。彼女は、彼女が十全に立ち帰るために私がイスラエルにしたことをもって、私を恐れることはありませんでした。それどころか、彼女は真に立ち帰る必要があるのに、むしろ偽って立ち帰ったのです。「そしてこれらすべてにおいて、不実なユダは、彼女の心の全体から私へと立ち帰ることは

ゆえに、彼女〔ユダ〕が含まれたことすべてについてでした。そこで私は彼女を追いやり、彼女に離縁状を渡した」(エレ 3:6-8)。なぜなら、私はイスラエルの民を追いやり、彼らをアッシリア人たちに投げ捨てたからです。「そして私は彼女に、彼女の手もとに、離縁状を渡した。しかし、不実なユダは恐れなかった」(エレ 3:8)。イスラエルが経験したそうした諸々の苦難の後、つまり神によって追いやられた後、自らの手に離縁状を受け取りながら、ユダは、過ちから向きを変えられなければなりませんでしたし、別の罪に関して告発されても、自らのために同様のことを用心しなければなりませんでした。〔ところが〕ユダは罪を犯すことをやめなかったばかりか、かつての悪行を二倍にしたのです。それがどれほどかという、それ〔ユダの会衆〕と比較して、かつて自身が非難されたイスラエルの会衆がより正しくなるほどでした。「そして私は彼女に、彼女の手もとに、離縁状を渡した。しかし、不実なユダ」、つまり彼女〔イスラエル〕の姉妹「は恐れなかった。そして彼女は行って、自分自身もまた淫行に耽った。そして彼女の淫行は無になった。そして彼女は木や石と姦淫した。そしてこれらすべてにおいて、不実なユダは、彼女の心の全体から私へと立ち帰ることはなく、偽って」(エレ 3:8-10)〔私へと立ち帰ったのでした〕。彼女は、彼女が「心の全体で私へと立ち帰る」ために、また彼女が固執していた虚偽が取り去られたときに本当に悔い改めをなすために、彼がイスラエルにしたことをもって、〔彼を〕恐れることはありませんでした。「そして主は私に言った、イスラエルは不実なユダから自分の魂を義とした、と」(エレ 3:10以下)。イスラエルの罪は、ユダの過ちに比べられるとき、いわばその〔イスラエルの〕魂を義としました。

なかったが、偽って「立ち帰った」。そして主は私に言った、イスラエルは不実なユダから自分の魂を義とした、と」(エレ3:10以下)。イスラエルの罪は、ユダの過ちに比べられるとき、イスラエルの会衆の魂の義となりました。

第2節

(ギリシア語)

(承前) したがって、「行きなさい、そしてこれらの言葉を北に向かって読みなさい」(エレ3:12)。

もし言葉が理解されるなら、これらにおいて何が明らかにされることを彼が欲したのか見てみましょう。異邦人の招きは、イスラエルの墮落から始まったものでした。そして使徒たちは、ユダヤ人の諸会衆に次のように宣べ伝えて言いました。すなわち、「あなたがたのために救いの御言葉が遣わされたが、あなたがたは自分自身を〔それに〕値しないと見なしたので、見よ、私たちは異邦人に向かった」(使13:46)、と。そして使徒〔パウロ〕はこれらのことについて知ったので、自分が知っている次のようなことを言いました、「彼らの墮落によって、救いは異邦人に〔与えられた〕、彼らを妬ませるために」(ロマ11:11)。したがって、かの民の多くの罪は、その民が見捨てられるようにさせ、また私たち——契約に無縁の者、約束のよそ者(エフェ2:12)——が救いの希望(1テサ5:8)に臨むようにさせたのです。では、聖なる地と呼ばれているところに無縁である者としての私に、一体いかにして「できるのでしょうか、今や神の約束について語ることや、アブラハム、イサク、ヤコブら父祖たちの神を信じることや、また預言者たちによってあらかじめ宣べ伝えられたイエス・キリストを神の恵みによって受け入れること」など。もしあなたがこれらの二つの民——イスラエル出自の民と異邦人出自の民——を理解するなら、私と共に見てください、イスラエルの移住と、イスラエルのかの民について。そしてかの民については、次のように書かれている

(ラテン語訳)

(承前) したがって、「行きなさい、そしてこれらの言葉を北に向かって読みなさい」(エレ3:12)。

もしあなたが歴史を理解するなら、これらにおいて何を神秘的な言葉が示しているのか見てみましょう。異邦人の招きは、イスラエルの罪から始まったものでした。それは、使徒たちがユダヤ人の諸会衆に予言した告知の後に、次のように証言しているとおりです。すなわち、「あなたがたのために御言葉が遣わされたが、あなたがたは自分自身を永遠の生に値しないと見なしたので、見よ、私たちは異邦人に向かった」(使13:46)、と。パウロもまた聖なる声で次のように言いました、「彼らの罪によって、救いは異邦人に与えられた、彼らを妬ませるために」(ロマ11:11)。したがって、かの民の多くの罪は、その民が主から見捨てられるようにさせ、また私たち——私たちは契約や約束に無縁の者でした(エフェ2:12)——が救いの希望(1テサ5:8)に臨むようにさせたのです。では、聖なる地の外のどこかで生まれた私に、一体いかにして〔次のことができるのか〕私は分かりません、〔すなわち〕今や約束について語ることや、アブラハム、イサク、ヤコブら父祖たちの神を信じることや、またすべての預言者たちの声によってあらかじめ宣べ伝えられたイエス・キリスト〔を信じること〕など。もしあなたがこれらの二つの民——イスラエルと異邦人の〔民〕——を理解したなら、理解してください、ユダの人々の民からのイスラエルの移住を。そしてかの民については、次のように書かれていることを「理解してください」、「私は彼女を追

ることを、私と共に理解してください、「私は彼女を追い出し、彼女に離縁状を渡した」(エレ 3:8)。というのも、神はかの民を追い出し、その民に離縁状を渡したのです。そうしたものは、結婚した者たちにあるものです。もし妻が夫にとって気に入らなくなったら、モーセの法が述べるところでは、離縁状が夫から生じ、妻は追い出されます(申24:1)。そして、不適切と見なされることをしたために先の妻を追い出した者にとって、別の妻と結婚することが可能になります。このように、理性によって、離縁状を受け取る者たちを見てください。そして、その者たちは離縁状を受け取ったので、このことゆえに、あらゆることに関して見捨てられてしまいました。では、預言者たちは彼らの間で今やどこにいますのでしょうか。しるしは彼らの間で今やどこにあるのでしょうか(詩73 [74]:9、イザ 3:2)。神の顕現はどこにあるのでしょうか。礼拝は、神殿は、犠牲は(ホセ 3:4)どこにあるのでしょうか。彼らは自分自身の場所から追い出されてしまいました。このようなわけで、彼はイスラエルに離縁状を渡したのです。

それから、私たちユダは——「自分たちのことを」ユダ族というの、救い主がユダの部族から出てきたからです。「私たちの主がユダから出てきたことは明らかである」(ヘブ 7:14)——主へと立ち帰りました。しかし、私たちの終末は——それはまだ来ませんように——かの者たちの終末に極めて似たものとなり、さもなくばより悪いものにさえなります。

第3節

(ギリシア語)

(承前) というのも、こうしたことがこの世の終わりに(マタ 13:49) 私たちに関してもあるだろうことは、救い主によって福音の中で言われていることから明らかです。その中で彼は次のように言っています、「不法がはびこるので、多くの者たちの愛は冷たくなるだろう。しかし、最後まで耐える者、この者は救われるだろう」

い出し、彼女に離縁状を渡した」(エレ 3:8)。というのも、神はイスラエルの民を追い出し、離縁状を渡したのです。そのため、あとに続くものは例を確かなものとしています。モーセの法が命じているところでは、その夫にとって気に入らない妻には離縁状が渡され、彼女は追い出され(申24:1)、それから夫には、第二の「妻」を娶ることが許されます。この意味に従って、ユダヤ人は離縁状を受け取っているものであり、また完全に主から見捨てられてしまったのだと理解してください。では、預言者たちは彼らの間で今やどこにいますのでしょうか。徳のしるしはどこにあるのでしょうか(詩73 [74]:9、イザ 3:2)。神の顕現はどこにあるのでしょうか。神殿も、犠牲も(ホセ 3:4)、他の礼拝も何でも、律法の巻物には述べられていません。彼らは自分自身の場所から追い出されてしまいました。このようなわけで、主はイスラエルに離縁状を渡したのです。

これらのことの後で、私たちは——聖書の中で私たちはユダ族と呼ばれています。ユダ族というのはユダの部族ゆえであり、その家系からは救い主が出てきました——主へと立ち帰りました。しかし、私たちの終末は——願わくは、少なくともこの時代にそれが果たされることがありませんように——ユダの罪に似た未来となり、それどころかより悪いものになります。

(ラテン語訳)

(承前) そして、この世の完成において(マタ 13:49)、ユダ族に起こったことよりも悪いことが私たちに起こるであろうとあなたが信じるように、救い主が福音の中で予言したことを聞きなさい、「不法がはびこるので、多くの者たちの愛は冷たくなるだろう。しかし、最後まで耐える者、この者は救われるだろう」(マタ 24:12-13)。

(マタ24:12-13)。そして、やがて来るだろう者はしるしや驚異を行い、選ばれた者たちさえをも、可能な限り惑わそうとするのでした(マタ24:24)。そして、多くの教会から信心深い者がすぐにも見つからなくなってしまうとして、救い主がご自分の来臨について、「しかし人の子が来るとき、彼は地上に信仰を見出すだろうか」(ルカ18:8)と述べていますが、こうしたことは私たちに関することなのです。そしてもし本当の意味で、私たちが群衆によってではなく、真実によって物事を判断するなら、また集まった多くの者たちを見ることによってではなく、選択によって物事を判断するなら、今や私たちは自分たちが信心深くはないことを見出すでしょう。しかし次のようなときには信心深い者たちもいたのです、[すなわち]高貴な殉教が生じたときに、[また]私たちが殉教者たちを先に送り出してから、墓から集会にやってきたときに、そして教会全体が迫害されることなく現れた[ときに]、そして初学者たちが殉教について教えを受けたり、「死に至るまで」(黙2:10)、「ひるむことなく」(フィリ1:28)、生きる神(使14:15)のことで心を乱されることなく、真実を主張する者たちの死について教えを受けたりした[ときに]。そのときに私たちは不思議かつ驚くべきしるしを見た者たちをも知りました。そのときに信心深い者たちはわずかでしたが、彼らは本当に信心深く、生命へと通ずる狭く困難な道を旅しました。しかし今や、私たちが数多くなったとき、多くの者が選ばれた者となることはできないので——というのも、イエスは嘘について次のように言ったわけではないからです、「招かれた者は多いが、選ばれた者は少ない」(マタ22:14)と——、敬神を約束した者たちの多くのうち、神の選びと祝福に届いた者たちは非常にわずかです。

第4節

(ギリシア語)

そこで、もし彼〔神〕が、「まず私はイスラエ

また他の箇所では、「天と地においては、しるしや驚異が起こった、選ばれた者たちさえをも、可能な限り騙すために」(マタ24:24)。このような不信は人類全体に起こることでしょう。来るべきことすべてを知っている私たちの主も次のように言っています、「しかし人の子が来るとき、彼が地上に信仰を見出すとあなたは思いますか」(ルカ18:8)。しかしもし実際のところ私たちが群衆ではなく、信仰と真実を判断するなら、また会衆ではなく、人の意志を考慮するなら、今や私たちはそれほど多くの数の教会で、信仰が見つけれられるのは困難であることを見出すでしょう。しかし次のようなときには信心深い者たちもいたのです、[すなわち]殉教者たちの犠牲が捧げられていたときに、[また]彼らが血まみれの葬儀に出席した後、悲しみながら教会へと立ち帰ったときに。群衆は皆嘆き悲しんでいました、初学者たちが信仰の最初すぐに殉教に耐えるように導かれていたときに、[また]女性たちや性的に弱い者が「死に至るまで」(黙2:10)、「ひるむことのない」(フィリ1:28)ままだったときに。しかしそのとき天からはしるしが、そのとき地からは前兆が現れていたのです。そのとき確かにわずかな者たちしかいませんでしたが、彼らは本当に信心深く、生命へと通ずる狭く困難な道を歩きました。しかし今や、私たちが数多くなったとき、多くの者が善き者となることは困難なので——というのも、イエスは嘘について次のように言ったわけではないからです、「招かれた者は多いが、選ばれた者は少ない」(マタ22:14)と——、キリスト教信仰を約束したこれほど多くの者たちのうち、信仰と真実を持ち、また幸福に値する者たちは非常にわずかししか見出されませんでした。

(ラテン語訳)

そこで、もし彼〔神〕が、「まず私はイスラエ

ルをその罪ゆえに追いやり、移住へと追いやったが、ユダはイスラエルに起こったことを聞いているにもかかわらず立ち帰らなかった」と言うなら、彼は私たちの罪について言っているということです。イスラエルに起こったことと、かの民に関する過ちが朗読されるときには、私たちは恐れを感じて次のように言うべきです、「もし『彼が自然のままの枝を惜しまなかった』(ロマ11:24) なら、彼はどれだけより多く私たちが惜しまないことでしょうか。もし良いオリーブであることを誇る者たちを(ロマ11:24)、アブラハム、イサク、ヤコブら父祖たちの根に根付かされている者たちを(ロマ11:18) 惜しむことのない、恵み深く、同時に人を愛する神が切り倒したなら、彼はどれだけより多く私たちが惜しまないことでしょうか」、と。というのも、「神の恵み深さと厳しさを見なさい」(ロマ11:22)。というのも、彼は恵み深い厳しくないというわけでもなければ、また厳しいが恵み深くないというわけでもないからです。もし彼が恵み深いだけで厳しくはなかったら、私たちは彼の恵み深さをさらに軽んじていたことでしょう(ロマ2:4)。もし彼が厳しいが恵み深くはなかったら、私たちはおそらく私たちの罪について絶望しさえしていたことでしょう。しかし現に神は恵み深くもあり、厳しくもある神なので——というのも、私たち人間は、悔い改めるときには彼の恵み深さを必要としますが、罪に留まるときには厳しさを「必要とするからです」——、彼は預言者たちを通じて私たちに語り、次のように言っています、「あなたはイスラエルの家が私になしたことを見たか」、イスラエルとは、私にとってはかの民のことを意味しています、「彼女〔イスラエル〕はすべての高い山の上に、またすべての葉陰に覆われた木の下に行った」(エレ3:6)。もしあなたが次のようなこと——パリサイ人が尊大に神殿へと上り、自分の胸も打たなければ、自分の悪行も気に留めず、それどころか「私はあなたに感謝します、私が他の者たちのように、奪い取る者、不正な

ルをその罪ゆえに追いやり、移住へと残したが、ユダはイスラエルに起こったことを聞いているにもかかわらず、私に立ち帰ることを望まなかった」と言うなら、彼は私たちの罪について言っているということです。私たちは、ユダヤ人たちの民が被ったことを読むとき、恐れることはありませんし、次のようにも言いません、「もし『彼が自然のままの枝を惜しまないなら』(ロマ11:24)、神はどれだけより多く私たちが惜しまないことでしょうか。もし自らが良いオリーブであることを誇る者たちを(ロマ11:24)、またアブラハム、イサク、ヤコブら父祖たちの根を、最も寛大な神であるキリストがご自身のために切り倒したなら、彼はどれだけより多く私たちが惜しまないことでしょうか、もし私たちが同様のことをしたら」、と。「神の恵み深さと厳しさを見なさい」(ロマ11:22)。というのも、彼は恵み深いだけで厳しくないわけではなく、厳しいだけで恵み深くないわけでもないからです。もし彼が恵み深いだけだったら、私たちは彼の恵み深さを軽んじていたことでしょう(ロマ2:4)。もし「彼が」厳しいだけだったら、救いの絶望は、私たちが犯した罪ゆえに、私たちが過ちへと突き落としたことでしょう。しかし現に神は恵み深くもあり、厳しくもあるように——私たちは皆確かに、悔い改めの報いとして彼の恵み深さを、過ちの代償として「彼の」厳しさを必要としています——、彼は預言者を通じて私たちに語り、次のように言っています、「あなたはイスラエルの家の住処が何を私になしたかを見たか」、今の個所では、イスラエルをユダヤ民族として解釈してください、「彼女〔イスラエル〕はすべての高い山の上へと出発し、またすべての生い茂る木の下まで下がった」(エレ3:6)。もしあなたが次のようなこと——パリサイ人が尊大に神殿へと上り、自分の胸も打たなければ、自分の悪行も気に留めていないこと——を考慮するなら、その者はどのようにして「私はあなたに感謝します、私が他の者たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者、ある

者、姦淫する者、あるいはこの徴税人のようでないことを。私は週に二度断食し、私の財産の「十分の一税を払っています」などと言っていること（ルカ18:11-12）——を見るなら、その者が「すべての高い山の上に」（エレ3:6）非難されるべきやり方で昇り、尊大さに従い、また傲慢さに従って横柄さを愛したさまを見ることでしょ（エレ31:29のルキアノス改訂版を参照）。この者は「高い丘の上に」（エレ2:20）も昇り、実をつけないが「生い茂る」ような、「すべての木の下に」いました（エレ3:6）。というのも、生い茂る木もあれば、実をつける木もあるからです。〔異教徒の祭儀を執り行う〕茂みのために木々を植えるとき、彼らは実をつけるものではなく、イチジクでもブドウでもなく、単に楽しみのために、実をつけない木々を植えます。あなたは、こうしたものが異端者たちの言葉であり、また聞いている者たちを決して立ち帰らせることのない彼らの尤もらしさの美であることが分かるでしょう。したがって、誰かが自分自身をこうした言葉に委ねるときはいつでも、その者は「すべての生い茂る木の下に」行ったのです。彼は「すべての木の」とは言わずに黙したのであり、「すべての実をつける木の」とさらに付け加えたのではなく、「すべての生い茂る木の下に」と言ったのです。このことゆえに、なぜ律法制定者がかつて、「あなたはすべての木をあなたの神、主の祭壇の傍へと植えてはならない。また茂みを作ってはならない」（申16:21）と言ったのかが理解できるでしょう。というのも、茂みという名前すら禁じられているのを、あなたは見出すからです（申12:3）。

第5節

（ギリシア語）

「そして彼女はそこで淫行に耽った。そして彼女が淫行に耽った後、私はこれらすべてのことを言った、『私のもとへと帰ってきなさい』と。しかし、彼女は帰ってこなかった。そして不実

いはこの徴税人のようでないことを。私は週に二度断食し、私の財産から十分の一税を払っています」（ルカ18:11-12）などと言うのでしょうか。あなたは、その者がどのように「すべての高い山の上に」（エレ3:6）昇り、またその傲慢さによって燃え立たせられたために、〔どのように〕考えているのかをあなたは見ます。「丘の上に」昇る別の者たちもおり、彼らは実をつけないが「生い茂る」ような、「すべての木の下に」置かれました。というのも、ある性質の木は収穫に関して豊かなものであり、また別の〔性質の木〕は単に葉の繁りに関して豊富なものであるからです。茂みや光のためには、誰もイチジクやブドウや豊作をもたらす木々を植える者はなく、むしろ視覚の楽しみのために単に繁茂するだけの木々を植えます。こうした者たちは異端者たちであり、彼らは自分の話を言葉の飾りで装いますが、それは聞いている者たちを過ちから立ち帰らせるためではなく、彼らを楽しませるためでした。したがって、こうした誘惑に納得してしまう者は、「すべての木の下に」去ったのです。同様に留意すべきは、なぜ彼が「すべての木を」とは言わずに黙したのか、また〔なぜ〕彼が「すべての実をつける木を」とさらに付け加えたのではなく、「すべての繁茂する木の下に」とはっきり言い加えたのか、ということです。このことゆえに、なぜ律法において「あなたはすべての木をあなたの神、主の祭壇の傍へと植えてはならない。また茂みを作ってはならない」（申16:21）と命じられているのかを、もしあなたが理解するなら〔明らかなように〕、林が神殿に植えられることはまったく特別に禁じられているのです。

（ラテン語訳）

もしあなたがなぜ次のように言われているかに注目したら、すなわち「そして彼女はそこで淫行に耽った。そして彼女が淫行に耽った後、私はこれらすべてのことを言った、『私のもとへ

なユダは彼女の不実を見た」(エレ 3:7)。私たちもまた冒涇したのです。私が「ここで「私たち」と言っているのは、罪人たちが、ということ。罪人たちは神の取り決めを守りませんでした。また彼らは、かの者たちが——高貴な者たちであり、アブラハムからの出自を持つ者たちであり、約束を受けた者たちであるにもかかわらず——契約を破っていることを見ようとしません。したがって、私たちが考慮すべきは、かの者たちが祝福や約束から外れ落ちていること、そして父祖たちに由来するものは彼らに何の益ももたらさなかったということです。」「かの者たちでさえそうであるなら、」私たちが罪を犯したら、どれほどさらに見捨てられることでしょう。「もしあなたがたがアブラハムの子なら、アブラハムの業をしているはずだ」(ヨハ 8:39)と、彼らに救い主は言っています。またさらに「洗礼者」ヨハネは「次のようにも言っています」、「私たちはアブラハムを父として持っているなどと、自分たちの中で言い始めてはならない。というのも、私はあなたがたに言っておくが、神はこれらの石ころからアブラハムの子らを起こすことができる」(ルカ 3:8)。彼は私たちを石になぞらえています。なぜなら私たちは「石の心」(エゼ 11:19、36:26)を持っており、真理に対して頑なになっているからです。しかし力強い神は、本当に石からアブラハムの子らを起き上がらせるのです、もし私たちが子を産むことに留まり(Ⅰテモ 2:15)、養子とすることの霊を保つなら(ロマ 8:15)。

そこで、イスラエルの家の不実を、神に対する取り決めを守らない不実なユダが見ました。そして彼女「イスラエル」が見捨てられたことすべてについて、彼女「ユダ」は次のことを見ました——というのも、私たちは、〈もし〉聖書を読むなら、ユダとしてこれらすべてを見るからです——すなわち、イスラエルの家が姦淫したことゆえに見捨てられたことすべてについて、神は彼女を追いやり、彼女に離縁状を渡したということを見ました」(エレ 3:7以下)。そし

と帰ってきなさい』と。しかし、彼女は帰ってこなかった。そして不実なユダは彼女の不実を見た」(エレ 3:7)「に注目したら」、私たちについて言われているのだと理解してください。私たちは神と交わした取り決めに放棄し、それを保持しませんでした。また私たちは先にいた民族も、契約も、約束も顧みることはなく、そして生まれの高貴さを同様の罪ゆえに無駄にしたことも顧みることはありませんでした。「もしあなたがたがアブラハムの子なら、アブラハムの業をしているはずだ」(ヨハ 8:39)と、彼らに救い主は言いました。また他の箇所で洗礼者ヨハネは「次のようにも」言っています、「私たちはアブラハムを父として持っているなどと、自分たちの中で言い始めてはならない。というのも、私はあなたがたに言っておくが、主はこれらの石ころからアブラハムの子らを起こすことができる」(ルカ 3:8)。彼は私たちが石であると暗示しています。なぜなら私たちは、石との類比に従って(エゼ 11:19、36:26)私たちの心を固くして、真理を弱めているからです。しかし万能の神は、本当に石からアブラハムの子らを起き上がらせるのです、もし私たちが彼の養子縁組に留まり、養子にした者を通じて私たちの中に霊を保護するなら(ロマ 8:15)。

そこで、イスラエルの不実を、自分が神と交わした取り決めを守らない不実なユダが見ました。「そして彼女「ユダ」は、彼女「イスラエル」が姦淫したことゆえに、その世代が含まれたことすべてについて見た」。というのも、イスラエルが被ったことすべてをユダである私たちが聖書で読むなら、イスラエルの家が姦淫したことゆえに、彼女「ユダ」が含まれたことすべてについて「すべてのゆえに」、主は彼女を追いやり、彼女に離縁状を渡したということを私たちは見出すでしょう(エレ 3:7以下)。そして私たちは、かの者たちは苦しんだが私たちがよりよいものへと変えた諸々のことから、かの者たちが罪ゆえに捕囚に引き渡され、敵どもによって殺されたこと——そして彼らの諸都市が火で

て私たちは、彼〔神〕がかの者たちにしたこと
から教え諭されなければなりません。彼は彼ら
を罪に従って裁き、見捨て、捕囚へと引き渡し、
殺人へと引き渡し、敵どもに引き渡しました。
私たちはこれらのことから立ち帰らなければな
りませんし、私たちのそれぞれが次のように考
えなければなりません。すなわち、「もし彼が自
然のままの枝を惜しまないなら」、彼はどれだけ
より多く私たちを惜しまないでしょうか（ロマ
11:21）。もし彼が父祖たちからの出自を持つ者
たちを、彼らが罪人となったためにこのように
追い出したら、諸民族から呼び寄せられた私
たちはどんな苦難を経験することになるのでし
ょうか。私たちはこうした諸々のことを何ら考
慮せずに、呼び寄せられましたが、それはかの
民が、僕が尊重されているのを見たり、生まれ
の卑しい者が近づいてきたのを目にしたりして、
妬みを起こすようにするためです（ロマ11:11）。
もしかの者たちがすでにそうした苦難を経験
したなら、私たちがもし罪を犯そうものなら、
どれだけより多く見捨てられるでしょうか。

「イスラエルの家が姦淫したために、私は彼女
を追いやり、彼女に、彼女の手もとに、離縁状
を渡した。しかし、不実なユダは恐れなかった」
（エレ3:8）、私がイスラエルの家にしたことを、
すなわち、「私は彼女を追いやり、彼女に離縁状
を渡した」ことを「恐れなかった」。彼女は、か
の者たちに起こったことを恐れませんでした。
「喩えるならこういうことです、」誰かが一家の
主人の家へと入ってきました。この者は新しく
「奴隷として」購入されたのです。彼は先にいた
家内奴隷たちの誰を、何のために敬うべきなの
か、家内奴隷たちの誰を、何のために軽蔑する
べきなのか尋ねました。「それらのことを」しっ
かりと見極めた後、もし彼が主人の家に留まろ
うと思うなら、彼は先にいた奴隷たちがしたこ
とに陥ることを避けるでしょう。彼らは過ちを
犯したために、放り出され、処罰に引き渡され
たのですから。それから、先にいてかつ尊敬さ
れていた奴隷たちが何をしたのかを、またどん

焼き払われたこと——を理解しなければなりま
せん。それゆえに、すでに述べたように、私
たちはこれらのことを私たちと共に熟考しなけ
ればなりません。そのようなとき、「もし神が自然
のままの枝を惜しまないなら」、彼はどれだけ
より多く私たちを惜しまないでしょうか（ロマ
11:21）。もし彼が父祖たちの家系に出自を持つ
者たちを、罪ゆえにこのように追い出したら、
諸民族から呼び寄せられた私たちはどんな苦難
を経験しなければならないのでしょうか。私
たちはこうした諸々のことを何ら考慮せずに、呼
び寄せられましたが、それは彼らが、僕たちが
いつか自由になるのを見たり、かつては生まれ
の卑しかった者が今では神の子らとなるのを見
たりして、嫉妬に駆り立てられるようにするた
めです（ロマ11:11）。もしかの者たちがすで
にそうした苦難を経験したなら、私たちがもし罪
を犯そうものなら、どれだけより多く、よりひ
どい苦難を経験するのでしょうか。

「イスラエルの家の住処が姦淫したために、私
は彼女を追いやり、彼女に、彼女の手もとに、
離縁状を渡した。しかし、不実なユダは恐れな
かった」（エレ3:8）、イスラエルの住処がした
ことを。なぜなら、「私は彼女を追いやり、彼女
に離縁状を手渡した」のです。不実なユダは、
自らの罪ゆえに彼女自身が同じような目に遭わ
ないかと恐れることはありませんでした。もし
最近購入された者〔奴隷〕が買い手であり主人
である方の家に入ったら、その者は仲間の奴隷
に、前の奴隷たちの中で誰が主人を怒らせたか、
その者はどんな報いを得たかを尋ねるでしょう。
そしてもし彼が主人の家に留まろうと望むなら、
鞭打ち、拷問、追放に値するような者たちがし
たと彼が聞いたことをしないように用心しなけ
ればいけません。それから、主人から自由を手
に入れた者たちが何をしたのかを極めて注意深
く調べることで、その者は力の限りを尽くして、
彼らがしたと自分が確認したことをするように
努力するのです。それゆえに、私たちもまた神
の僕ではなく、偶像と悪魔の僕でしたが、その

な自由に与っていたのかを学ぶと、彼は彼らを妬みました。一方で、私たちもまた神の僕ではなく、偶像と悪魔の僕であり、昨日や一昨日〔のようなごく最近〕に神に近づいた〔ばかりの〕異邦人でした。聖書を朗読しましょう。誰が義とされたのか、誰が罪に定められたのかを見ましょう。義とされた者たちに倣いましょう。捕囚とされた者たち、神から追い出された者たちが陥った諸々のことに陥ることを避けましょう。

第6節

(ギリシア語)

「しかし、不実なユダは恐れなかった。そして彼女は行って自らもまた淫行を行った」(エレ3:8)。まずイスラエルが淫行を行ってから、その後にユダもまた淫行を行いました。「そして彼女の淫行は無となり、彼女は木や石と姦淫した」(エレ3:8以下)。私たちが罪を犯すときはいつでも、石の心となって石と姦淫するだけです。また私たちが罪を犯し、また「すべての生い茂る木の下で」(エレ3:6)淫行を行うときはいつでも、私たちは木とも姦淫するのです。「そしてこれらすべてにおいて、不実なユダは、彼女の心の全体から私へと立ち帰ることはなかったが、偽って〔立ち帰った〕」(エレ3:10)。もし私たちが神へと立ち帰ったものの、不完全にであったなら、私たちは心の全体から立ち帰ってはいない者として罪に問われるでしょう。それゆえに、〈「不実なユダは、彼女の心の全体から私へと立ち帰ることはなかった」のです。〉〔ここで主は〕「そして不実なユダは立ち帰ることはなく、そこにいた」と言っているのではなく、「そして不実なユダは、彼女の心の全体から私へと立ち帰ることはなかったが、偽って」立ち帰ったのだ、と言っているのです。したがって、真に立ち帰ることとは、古いもの〔旧約聖書〕を読むこと、義とされた者たちを知ること、彼らに倣うこと、それらを読むこと、咎められた者たちを見ること、そうした咎めに陥るのを避けること、新約聖書を、使徒たちの言葉を読むこ

後で諸民族から集められ、キリストを信じたのです。聖書を朗読しましょう。誰が義とされたのか、誰が神を怒らせたのかを見ましょう。そしてあらゆる注意深さをもって、義とされた者たちがしたと私たちが読んだことをするように努力しましょう。そして捕囚へと引き渡された者たち、神の相続から追い出された者たちが陥った諸々のことに陥らないように用心しましょう。

(ラテン語訳)

「しかし、不実なユダは恐れなかった。そして彼女は行って自らもまた淫行を行った」(エレ3:8)。まずイスラエルが破滅した淫行の後に、ユダもまた淫行を行いました。「そして彼女の淫行は無となり、彼女は木や石と姦淫した」(エレ3:8以下)。私たちが神に対し固い心で罪を犯すときは、私たちは石と淫行を行うだけです。私たちが自発的に罪を犯したときは、「すべての生い茂る木の下で」(エレ3:6)姦淫するのです。「そしてこれらすべてにおいて、不実なユダは、彼女の心の全体から私へと立ち帰ることはなかったが、偽って〔立ち帰った〕」(エレ3:10)。そして私たちは神へと立ち帰りはしましたが、しかし心の全体から立ち帰ったわけではないので、「不実なユダは、彼女の心の全体から私へと立ち帰ることはなかった」と言われています。〔ここで主は〕「不実なユダは立ち帰ることはなく、黙った」と言っているのではなく、「そして不実なユダは、彼女の心の全体から私へと立ち帰ることはなかったが、しかし偽って」〔立ち帰ったのだと〕言っているのです。これは、立ち帰る者たちも、心の全体からではなく偽って立ち帰るのなら、真に立ち帰ったわけではないことを示すためです。したがって、旧約聖書の歴史と預言者を読みましょう。そしてもし私たちが義とされた者たちを見つけたなら、彼らがそれを通じて義とされたことに倣いましょう。福音書とすべての新約聖書を読みましょう。使

と、読んだ後にこれらすべてを心に書くこと、それらに従って生きることなのです。それは離縁状が私たちにも渡されることがないようにするためであり、むしろ私たちが聖なる相続に与ることができるようにするためです。〈そして〉救われた諸民族の充満によって、イスラエルがそのとき〔救いへと〕入ることができるようにするためです。というのも、「もし諸民族の充満〔すべての諸民族〕が入るなら、そのとき全イスラエルも救われるだろう」（ロマ11:25以下）からであり、また「一つの羊の群れ、一人の羊飼いとなる」（ヨハ10:16）からです。〔その羊飼いは〕同じキリスト・イエス——「この御方に栄光と支配が永遠のうちの永遠の中にある」（Iペト4:11）——において全能の神を賛美することを教えるのです。アーメン。

徒パウロの公同書簡を読みましょう、そして私たちの心に書きましょう、天の原理に従って生きながら。それは離縁状が私たちにも渡されることがないようにするためであり、むしろ私たちがキリスト・イエスと共に共同相続人となるようにするためです。そして諸民族の充満が神の教会を占領することによって、最後のものとしてイスラエルが救われるようにするためです。それは次のような雄弁に従っています。すなわち、「諸民族の充満が入るなら、そのとき全イスラエルも救われるだろう」（ロマ11:25以下）。そして「一つの羊の群れ、一人の羊飼いとなる」（ヨハ10:16）。〔その羊飼いは〕キリスト・イエス——「この御方に栄光と支配が永遠のうちの永遠の中にある」（Iペト4:11）——と共に、自分の民が全能の主を賛美することを公けに教えるのです。アーメン。

第8説教（エレ10:12-14）＝ラテン語訳の第5説教

解説

第8説教は、エレ10:12-14を題材とした中編である（全9節）。第1節では、神の徳である強さ、知恵、英知が、それぞれ地、世界、天に割り当てられ、さらに最初の二つの組み合わせの解釈が論じられる。第2節では、英知と天の組み合わせの解釈が取り上げられる。第3節では、神が「地の果てから雲を上らせた」の一節が取り上げられ、ここでの「雲」の解釈が示される。第4節では、同じ一節の「地の果て」の解釈が展開された後、神が「雨のために稲妻を作った」という一節の「稲妻」に関する科学的な説明がなされる。第5節および第6節では、神が「倉から風を導き出した」における「倉」の解釈が示される。第7節では、「すべての人は知識から愚かにされた」の一節が解釈される。第8節では、「神の愚かさ」の意味が説明される。そして第9節では、「この世の知恵」と「神の知恵」が対比されつつ、「神の愚かさ」との関係が論じられた後、祈りによって説教が締め括られる。

翻訳

「主、強さによって地を造った御方」について。「人は皆知識から愚かにされた」まで。

第1節

（ギリシア語）

預言者が三つのいわゆる神の徳——〈すなわ

（ラテン語訳）

預言者が三つのいわゆる徳——すなわち、そ

ち、その強さ、その知恵、その英知——を取り上げるとき、彼はそれらの各々に自分たちの「よく知る」何らかの働きを〈割り当てています〉。すなわち、強さには地を、知恵には世界を、英知には天を。というのも、本文が次のように言っているのを聞いてください。「主、強さによって地を造り、知恵によって世界を立て直し、英知によって天を広げた御方」（エレ10:12）。そして私たちは、私たちの地のためには——なぜなら、アダムについて、「あなたは地である」（創3:19）と書かれているからです——神の強さを必要としています。というのも、神の力なくして、私たちは、肉の思いに基づかない限りのことはどんなことも完成させることはできないからです（ロマ8:6）。地上の身体が殺されることによって（コロ3:5）、霊の意志に従うことが生じるでしょう。なぜなら、使徒によれば、肉の行いは霊によって殺されるからです（ロマ8:13）。したがって、「主、強さによって地を造った御方」（エレ10:12）なのです。もしあなたがこの地にもやって来るなら、もしあなたがヨブに書かれていること——私たちはそれを最も正確な諸写本の中で見つけられるのですが——、すなわち彼が「何もないものの上に」（ヨブ26:7）地を定めたことを見ることができると、あなたはそれが神の強さによって非常に真ん中に据えられていることを見るでしょう。

私は「人の住む」世界の話もしたいと思います。私は人の住む魂を知っていますし、荒れ果てた魂を知っています。というのも、もしそれ「魂」が神を持たないなら、〈もし〉それが「私と私の父は彼のもとへと行き、彼の傍に留まるだろう」（ヨハ14:23）と言うキリストを持たないなら、もし魂が聖霊を持たないなら、それは荒れ果てているということです。しかし、それが神に満たされているとき、それがキリストを持つとき、聖霊がその中にあるとき、それは「人の住む」世界となります。しかし次のこと、すなわち父と子と聖霊が人の魂の中にあることは、さまざまに異なったかたちで聖書の中で述べら

る強さ、その知恵、その英知——を取り上げるとき、彼はそれらの各々に自分たちの「よく知る」働きを割り当てています。すなわち、強さには地を、知恵には世界を、英知には天を。というのも、聖書の順序を聞いてください。「主、強さによって地を造り、知恵によって世界を立て直し、英知によって天を広げた御方」（エレ10:12）。そして私たちは、それゆえに、私たちの地のためには——なぜなら、アダムについて、「あなたは地である」（創3:19）と書かれているからです——神の強さを必要としています。というのも、それなくして、私たちにとって、肉に抵抗することを遂行するのは不可能だからです（ロマ8:6）。しかし、地上の身体が殺されたとき（コロ3:5）、そのとき霊は意志に従うでしょう。使徒によれば、肉の行いは霊によって殺されるからです（ロマ8:13）。したがって、「主、強さによって地を造った御方」（エレ10:12）なのです。もしあなたがこの地にもやって来るなら、またもしあなたがヨブに書かれていること——しかし最も正確な諸写本に従って——、すなわち彼がどのように「何もないものの上に」（ヨブ26:7）それを定めたのかを熟慮するなら、あなたは全世界の真ん中で地の均衡を維持する強さを見出すでしょう。

さらに、私は世界の話をしたしたいと思います。「世界とは」ギリシア語でオイクーメネーと呼ばれるものであり、すなわち人の住むところのことです。私は人の住む魂を知っていますし、荒れ果てた魂を知っています。というのも、もしそれ「魂」が父なる神を持たないなら、もしそれが「私と父は彼女のもとへと行き、彼女の傍に留まるだろう」（ヨハ14:23）と言う子を持たないなら、もしそれが聖霊を持たないなら、魂は荒れ果てているということです。しかし、それが神に満たされているとき、それがキリストと聖霊を持つとき、それは人の住むところとなります。しかし次のこと、すなわち、父と子と聖霊が人の魂の中に宿っていることは、さまざまに異なったかたちで聖書の中で述べられてい

れています。少なくともダビデは告白の詩篇において、これらの霊たちに関して、父に頼んで言っています、「導きの霊で私を支えてください」(詩50 [51]:14)、「確かな霊を私の内側に新たに与えてください」(詩50 [51]:12)、「そしてあなたの聖なる霊を私から取り去らないでください」(詩50 [51]:13)。これらの三つの霊とは何でしょうか。導きの「霊」とは父のことであり、確かな「霊」とはキリストのことであり、そして聖なる霊とは〈聖霊〉のことです。これらのことは、世界が神の知恵以外において他に生じることはないということを証明することになります。というのも、「知恵は知恵者を助けるだろう、町にいる十人の権力を持つ者たちよりも」(コヘ 7:19)。「知恵と教えを軽んじる者は不幸であり、その希望は空しく、労苦は実らず、その業は役に立たない」(知 3:11)、ソロモンに帰せられる知恵〔の書〕はこのように述べています。このことゆえに、力の限り、世界は神の知恵によって立て直されるのですから、今こそ私たち自身もまた、おそらくは墮落してしまった私たちの世界が立て直されることを望もうではありませんか。というのも、この世界は墮落してしまいました、私たちが苦しみの場所へと入ったときはいつでも。この世界は墮落してしまいました、「私たちが罪を犯し、不敬虔であり、不正を行った」(ダニ 9:5) ときはいつでも。ですから立て直しが必要なのです。ところで、神は「世界を立て直す御方」(エレ 10:12)です。しかし、もしあなたが「世界を立て直す御方」という一節をこのようなものとして取らず、むしろより普通の意味で世界を理解するなら、どのようにして世界を立て直すのかを探してみればいいのです。世界の墮落を探してみればいいのです。なぜなら、あなたがその墮落を見つけたときに、その立て直しを見るためにです。したがって、もし誰かがこの世界にいるなら——もしあなたが世界をそのように理解するなら——、明らかなのは、立て直しが必要ですが、墮落しなかった者は誰も立て直しを必要と

ます。確かにダビデもまた告白の詩篇において、三つの霊たちを求めて言っています、「導きの霊で私を支えてください」(詩50 [51]:14)、「確かな霊を私の内側に新たに与えてください」(詩50 [51]:12)、「聖なる霊を私から取り去らないでください」(詩50 [51]:13)。これらの三つの霊とは何でしょうか。導きの霊とは父のことであり、確かな霊とはキリストのことであり、そして聖なる霊とは聖霊のことです。これらのことを私が述べたのは、人の住む世界が神の知恵において制作されているということの証明のためでした。というのも、「知恵は正しい者を助けるだろう、町にいる十人の権力を持つ者たちよりも」(コヘ 7:19)。「知恵と教えを軽んじる者は不幸であり、その希望は空しく、労苦は愚かであり、その業は役に立たない」(知 3:11)、ソロモンの名誉に帰せられるところの知恵〔の書〕はこのように述べています。このことゆえに、私たちができ得る限り、世界は主の知恵によって立て直されるのですから、今こそ私たち自身もまた、人の住むような私たちの魂が神の知恵によって立て直されるように、働くことに努めようではありませんか。というのも、それ〔世界〕は墮落してしまい、またそれは高みから、私たちが悲惨なこの場所へとやって来たときに倒れてしまいました。人の住むような私たちの魂は墮落してしまいました、私たちが罪を犯し、不当になし、不正に行い、不敬虔に運んだあとで。ですから破滅のあとに、それは立て直しを必要としています。しかし、もしあなたがこの意見に導かれたいくれば、世界全体の共通の破滅でも探してみましよう。その墮落のあと、結果として、神は「立て直す御方」と予言されています。この世界にいる者は誰でも、立て直しの前に墮落してしまいました。しかし、もしその者が墮落したなら、結果として、彼は立て直されなければなりませんでした。実際、誰も墮落なしに持ち上げられることはないのです。しかし、もし彼が立て直されたのなら、どんな破滅が先にあったのかを見てみましょう。私た

しないということです。また明らかなのは、世界にいる者たちのそれぞれが罪ゆえに墮落してしまいましたが、「主」は「泣き崩れた者たちを」立て直す御方であり、「すべての倒れている者たちを支えている」(詩144 [145]:14) ということです。「アダムにおいてあらゆる者たちは死に」、そしてこのように世界は墮落してしまいましたが、立て直しを必要としています。それは「キリストにおいてあらゆる者たちが生かされる」ためです(Ⅰコリ15:22)。その結果、私は二つのやり方で、世界に関することを弁明しました。すなわち、一方では、どのような意味でそれぞれの魂が「人の住む」世界であるのか、それとも荒れ果てたところであるのかを、どうすればそれぞれの人に示せるのか〔を弁明し〕、他方では、世界という言葉を、どうすればそれ自体について定められるのか〔を弁明しました〕。

第2節

(ギリシア語)

「そして英知によって彼は天を広げた」(エレ10:12)。彼が天に英知を受け入れたのは偶然にはありませんでした。というのも、箴言で次のように言われているのをあなたは見つけるでしょう。「神は知恵によって地の土台を据え、英知によって天を備えた」(箴3:19)。確かに、ある種の神の英知があり、〔人は〕それをキリスト・イエスにおいて〈以外に〉見つけることはありません。というのも、そうしたすべて〔の徳〕は、それが神のものである限り、キリストであるからです。彼は神の知恵であり、彼は神の力であり、彼は神の正義であり、彼は聖別であり、彼は贖いです(Ⅰコリ1:24, 30を参照)。このように、彼は神の英知なのです。しかし、基体〔下に置かれているもの〕は一つですが、観念においては違いに基づいて、たくさんの名前があります。また、キリストを知恵と理解するときと、彼を正義と理解するときでは、あなたはキリストについて同じことを理解するわけではありません。というのも、知恵として〔理

ちは皆、世界において、罪のために倒れてしまったのです。〔しかし〕主は追い出された者たちを立て直し、横たわっている私たちを高く上げたのです。「アダムにおいて私たちは皆死に」、そしてこのように世界は倒れてしまいましたが、立て直しを必要としています。それは「キリストにおいて私たちが皆生かされる」ためです(Ⅰコリ15:22)。それゆえに、私たちは世界について二つの理解を報告しました。すなわち、一つは、どのようにそれぞれの魂が、あるときは人の住むところに、またあるときは荒れ果てたところになるのか。もう一つは、どのように世界全体が一緒に墮落したのか〔という理解です〕。

(ラテン語訳)

「そして英知によって彼は天を広げた」(エレ10:12)。英知が天の現れにおいて受け入れられたのは偶然にはありませんでした。というのも、箴言でも次のように言われているのをあなたは見つけるでしょう。「神は知恵によって地の土台を据え、英知によって天を備えた」(箴3:19)。確かに、ある種の神の英知があり、あなたがそれをキリスト以外に探すことを私は望みません。というのも、そうしたすべて〔の徳〕は、それが神のものである限り、キリストであるからです。彼自身が彼の知恵であり、彼自身が強さであり、彼自身が聖別であり、彼自身が正義であり、彼自身が神聖さと贖いであり(Ⅰコリ1:24, 30を参照)、彼自身が——私がまさに今言及しているように——知恵でもあるのです。しかし、それは下にあるものにおいては一つですが、意味の多様さに応じて、異なった名前ですと呼ばれています。知恵はあることを示し、正義は別のことを示します。というのも、彼が知恵として言われるときには、その教えは神的なも

解する] ときには、あなたは彼を神的なものと人間的なものの知識として取るでしょうが、正義として「理解する」ときには、「人間の内的」価値に従ってあらゆる者に割り当てられた力として「取るでしょう」。聖別として「理解する」ときには、神を信じ、また神に縋る者たちが聖なる者となるようにする者として「取るでしょう」。したがって、このようにして、あなたは彼を英知としても理解するでしょう、彼が善と悪の、またどちらでもないものの知識であるときに。したがって、彼は天に住む者たちと天的な人間を生み出す者たちを区別しているので、[……] 悪を善から区別しているのです、その結果、神の英知によって天が広げられたために、かの天はもはや汚されていないばかりか、天である義人も汚されてはいません。義人もまた天であることは、次に示すとおりです。「そして英知によって彼は天を広げた」(エレ10:12)と言われています。

では、どのようにして天は広げられるのでしょうか、知恵がそれを広げるときに。知恵がそれを広げることは、「私は言葉を広げましたが、あなたがたは注意を向けなかった」(箴 1:24)という一節から明らかにされます。言葉の何らかの広がりがあることを彼は述べています。このように、天は広げられるのです。また詩篇の第103篇では、「天を幕のように広げる」(詩103 [104]:2)とされています。しかし、私たちの魂もまた、以前には縮められていましたが、広げられるのです。それは、神の知恵を受け入れることができるようになるためです。しかし、先述のことに戻しましょう。私たちは、天が英知によってできたことについて述べていました。そして、天的な人間を運ぶ者たちは、彼ら自身もまた天であると私たちは言いました。というのも、もし罪人に対して、「あなたは地であり、あなたは地へと去る」(創 3:19)とされているなら、「天の王国が彼のものである」(マタ 5:3) ような義人に対して、「あなたは天であり、あなたは天へと去る」と言われないことがある

のと人間的なものの教育になりますが、正義として「言われる」ときには、彼は価値の分配者にして審判者を意味します。聖別として「言われる」ときには、彼は神を信じる者たちを聖なる者とするような徳として描かれます。したがって、このようにして、私にとっては、彼の英知もまた、善と悪の、あるいはどちらでもないものの教えや説明として理解されます。そしてこのようなやり方で、今や英知によって彼は天を広げたと言われているのです。

では、どのようにして天は広げられるのでしょうか、英知がそれを広げるときに。「私は言葉を広げましたので、聞いてください。しかし、あなたがたは注意を向けなかった」(箴 1:24)。というのも、言葉の何らかの広がりがあることを彼は述べています。それは、今や天について言われるのと同じようにです、別の箇所にも「天を幕のように広げる」(詩103 [104]:2)と書かれていることに従って。というのも、私たちの魂は、以前には縮められていましたが、広げられるのです。それは、神の知恵を受け入れることができるようになるためです。しかし、先述のことに戻しましょう。私たちは、天が英知によってできたことを述べていました。そして、天的な人間を運ぶ者たちは天的であると私たちは言いました。というのも、もし罪人に対して、「あなたたちは地であり、あなたたちは地へと行く」(創 3:19)とされているなら、「天の王国が彼のものである」(マタ 5:3) ような義人に対して、「あなたは天であり、あなたは天へと行く」と、どうして言われないことがあるでしょ

でしょうか。あるいは、土からできた者ゆえに、「土からできた者の像を」(Ⅰコリ 15:49) 運ぶ者に、「あなたは地であり、あなたは地へと去る」(創 3:19) と言われているますが、一方で、天の者ゆえに、あなたが「天上の者の像を」(Ⅰコリ 15:49) 運ぶときに、「あなたは天であり、あなたは天へと去る」と言われることは適切ではないでしょうか。したがって、私たちのそれぞれは天の業と地上の業を持っているのです。地上の業とは、天にそれら〔の業〕を貯える者ではなく、地の上に貯える者を、それらと同族関係にあるような地の上に引き下げる業のことです(マタ 6:19以下を参照)。さらに、徳に従って行われたことは、天に〔それらの業を〕貯える者を、「天上の者の像を」運んだ者を、それらの業と同族関係にある天にあるところに引き上げるのです。

第3節

(ギリシア語)

「そして彼は地の果てから雲を上らせた」(エレ 10:13)。この命題は最近では詩編の中にも思い当たるものがあり(詩 134 [135]:7)、どのようにして神が「地の果てから雲を上らせた」のかを私たちは述べていました。これらのこと〔の解釈〕に、もう一度取り組む必要があります。〔その解釈を〕知っている方々のためには、述べたことの明快さや記憶のために、一方で、それを忘れてしまった方々や、〔その場に〕偶然いなかった方々のためには、このことの明確さのために。〔そうすることで、そのことが〕明らかにされ、明瞭になりますし、またいかようにも理解されるのです。私たちは聖者たちが雲であると言っています〈言っていました〉。というのも、「あなたの真理は雲にまで」(詩 35 [36]:6)の一節が、魂なき雲について言及されることはあり得ないからです。それどころか、神の真理は雲にまで及んでいます。それら〔雲〕は神の命令を聞いており、また自分がどこに雨を送り、何から〔雨を〕阻んでいるのかを知っています。

うか。コイコンの、すなわち土からできた者の像を (Ⅰコリ 15:49) 運ぶ者に、「あなたは地であり、あなたは地へと行く」(創 3:19) と言われていますが、では、天の者や、「天の者の像を」運ぶ者に、「あなたは天であり、あなたは天へと行く」と言われることが、どうして相応しいでしょうか。したがって、私たちのそれぞれは天の業と地上の業を持っているのです。もし地上の業があるなら、それらは、天ではなく、地にそれら〔の業〕を貯える者を、自らと同族関係にあるような地に引き下げるのです (マタ 6:19以下を参照)。さらに、徳に従って行われたことは、自分の貯えを、天の自分自身と近いところへと運びました。

(ラテン語訳)

そして彼は次のように繋げました、「そして地の果てから雲を導き出す」(エレ 10:13)。このような議論は最近では詩編の中にも思い当たるものがあり (詩 134 [135]:7)、どのようにして神が「地の果てから雲を導き出した」のかが私たちによって述べられました。これらのこと〔の解釈〕に、確かに今や、私たちはもう一度取り組まなければなりません。〔その解釈を〕お聞きになった方々は、ご自分が知っていることを十全に思い出さなくてはなりませんし、偶然〔その場に〕いなかった方々、あるいはそれを忘れてしまった方々は、そのときに私たちが意図をもって示した説教の文脈を理解しなければなりません。さて、私たちは聖者たちが雲であると言いました。というのも、「あなたの真理は雲にまで」(詩 35 [36]:6) と書かれていることが、魂なき雲について言及されることはあり得ないからです。それどころか、神の真理はそれらの雲にまで及んでいます。それら〔雲〕は神の命令を聞いており、また自分がどこに雨を送り、

というのも、それらは、神が雨を降らすか降らさないかを命じる雲であるため、「私は雲に命じて、もはや雨をその上に降らせない」（イザ 5:6）と書かれています。これらの雲に関して〔言う〕、もし雨がなければ、それは神が雲に対して葡萄畑や耕地に雨を降らせないように命じたからではなく、雲がまったく現れないからなのです。王国記の第三において次のように書かれているとおりです。そこにおいて、干ばつのときには雲が現れませんでした、エリヤの預言の言葉に従って雨が降り始めたときには、「人の跡のように」（王上18:44）雲の跡が現れ、雲は雨をもたらしました。しかし、それらの雲が存在しても、魂がたまたま雨に値する（値しない）ときには雨を降らさないように命じられているために、「私は雲に命じて、もはや雨をその上に降らせない」（イザ 5:6）と言われているのです。したがって、それぞれの聖者は雲なのです。モーセは雲であり、また雲のように言いました、「耳を傾けよ、天よ。私は語ろう。地に私の口の言葉を聞かせよう。私の教えを雨のように期待させよう」。〈もし彼が雲でなかったなら、彼は「私の教えを雨のように期待させよう」などとは決して言わなかったことでしょう。〉「私の言葉を露のように降らせよう」。雲として彼は言っています、「草の上の豪雨のように、青草の上の夕立のように。なぜなら私は神の名を呼んだからである」（申32:1-3）。同様に、雲としてイザヤもまた次のように述べています、「聞け、天よ。耳を傾けよ、地よ。なぜなら主が語ったのだから」（イザ 1:2）。そして彼自身もまた雲であり、自分と一緒に預言する雲のことを語ったのですから、彼は預言して「私は雲に命じて、もはや雨をその上に降らせない」（イザ 5:6）と言ったのです。

何からそれらを阻んでいるのかを知っています。これらの雲について、「私は私の雲に命じて、もはや雨をその上に降らせない」（イザ 5:6）と言われています。というのも、濃い空気から成っていると言われているそれら〔の雲〕に関して〔言う〕、もし雨がなければ、それは神が葡萄畑やどこかの耕地に雨を降らせないように命じたからではなく、それら〔の雲〕がまったく現れないからなのです。王国記の第三において次のように私たちが読むとおりです。干ばつのときには雲が現れませんでした、その後エリヤの預言に従って、来るべき雨のしるしが「人の跡のように」（王上18:44）示されたときには、さらにそのようにして雲がひと塊になった後に、雨が地上に降りました。しかし、いわばそれらの雲が存在しているにもかかわらず、魂が天の雨に値しなかったときには、雨を引き留めておくように命じられています。そして「私は雲に命じて、もはや雨をその上に降らせない」（イザ 5:6）と言われています。したがって、それぞれの聖者は雲なのです。モーセは雲であり、また雲のように言いました、「耳を傾けよ、天よ。私は語ろう。地に私の口からの言葉を聞かせよう。私の教えを雨のように期待させよう」。もし彼が雲でなかったなら、彼は「私の教えを雨のように期待させよう。私の言葉を露のように降らせよう」などとは決して言わなかったことでしょう。まるで雲のように彼は言っています、「草の上の豪雨のように、干し草の上の夕立のように。なぜなら私は神の名を呼んだからである」（申32:1-3）。同様に、イザヤもまた雲として次のように述べています、「聞け、天よ。耳を傾けよ、地よ。なぜなら主が語ったのだから」（イザ 1:2）。そして彼自身が雲であり、自分と一緒に預言する他の雲を知っていたのですから、それゆえに、彼は予言して「私は私の雲に命じて、もはや雨をその上に降らせない」（イザ 5:6）と言ったのです。

第4節

(ギリシア語)

では、もし私たちによって、雲とは誰なのかを理解されたのなら、どのようにして神が「地の果てから雲を上らせた」(エレ10:13)のかを見てみましょう。どうして「地の果て」からなのでしょうか。救い主は、「あなたがたの中で一番先になりたい者は、すべての人の最後〔果て〕になりなさい」(マコ 9:35)と言っています。パウロはこの掟を守り、この世で最後の者となりました。このことゆえに、彼は言っています。「というのも、私はこう思う。神は私たち使徒を、死に定められた者として、最後の者と宣言した。なぜなら、私たちはこの世にとって、また天使にとっても人間にとっても、見世物となったからである」(I コリ 4:9)。したがって、もし誰かが救い主の掟を守り、この生の間に最後の者となるなら、この者は雲となるのです。そして神は、地の最初の者〔有力者〕たちから雲を上らせるのではなく、執政官たちから雲を上らせるのでもなく、支配者たちから雲を上らせるのでもなく、富裕者たちからでもありません。というのも、「幸いなのは貧しい者たちである。なぜなら、神の国はあなたたちのものだからである」(ルカ 6:20)。あなたは、どのようにして神が最後の者たちから雲を上らせ、それに身体を与えたかが見えるでしょうか。このことゆえに、もし私たちが、神の真理がそこに達するような雲(詩35 [36]:6)になることを望むなら、すべての者たちの最後となりましょう。そして行動や気質において、「というのも、私はこう思う。神は私たち使徒を最後の者と宣言した」(I コリ 4:9)と言いましょ。う。たとえ私が使徒でなくとも、私には最後の者となることは可能なのです。そうすれば、「雲を上らせる」神は、「地の果て」から私を上らせてくれるでしょう。

「そして彼は雨のために稲妻を作った」(エレ10:13)。これらのことについて、ある者たちが言っているところでは、稲妻の発生は、互いに擦れ合う雲から生じるのだといひます。という

(ラテン語訳)

では、もし今や、雲とは誰なのかを私たちが理解したのなら、どのようにして神が「地の果てから雲を導き出す」(エレ10:13)のかを見てみましょう。救い主は、「あなたがたの中で一番先になりたい者は、すべての人の最後になりなさい」(マコ 9:35)と言っています。パウロはこの掟を守り、この世で最後の者となり、言っています。「というのも、私はこう思う。神は私たち使徒を、死に定められた者のように、最後の者と宣言した。なぜなら、私たちはこの世において、また天使にとっても人間にとっても、見世物となったからである」(I コリ 4:9)。したがって、もし誰か聖者が救い主の掟に注意し、この生において最後の者となったなら、この者は雲となるのです。そして神が雲を導き出すのは、地の最初の者〔有力者〕たちからではなく、執政官たちからでもなく、裁判官たちからでもなく、富裕者たちからでもありません。というのも、「幸いなのは貧しい者たちである。なぜなら、天の国はあなたたちのものだからである」(ルカ 6:20)。あなたは、どのようにして神が最後〔果て〕の者たちからそれらの身体的な雲を導き出すのかが見えるでしょうか。このことゆえに、もし私たちが、神の真理がそこに達するような雲(詩35 [36]:6)になることを望むなら、すべての者たちの最後となりましょう。そして行動と同じくらい気持ちも込めて、「というのも、私はこう思う。神は私たち使徒を最後の者と宣言した」(I コリ 4:9)と言いましょ。う。たとえ私が使徒でなくとも、私には最後〔果て〕の者となることは可能なのです。そうすれば、「雲を導き出す」神は、「地の果て〔最後〕」から私を導き出してくれるでしょう。

「そして彼は雨のために稲妻を作った」(エレ10:13)。自然の原因の探求者たちが言っているところでは、稲妻は雲の衝突から生み出されるのだといひます。それは、あなたが自分**にぶつ**かったために、それらの間に火が生じるような

のも、二つの石がぶつかりと火が生じるという
ような、地上で火打石に関して起こることは何
であれ、雲についても生じるのだと彼らは言う
のです。嵐のときに雲がぶつかることで、稲妻
が生じます。それゆえにまた、一般に、稲妻は
雷鳴と同時に生じます。雷鳴は雲が共にぶつかっ
た音を示し、一方で稲妻は光を生むのです。

第5節

(ギリシア語)

もしあなたが〔上記の〕具体例を理解したなら、私と共に、思惟的〔観念的〕な雲をも見て
ください。モーセは雲であり、ナウエ〔ヌン〕
の〔子である〕ヨシュアは雲でした。彼らは確
かに互いに会話を交わしており、彼らの言葉から
稲妻が生じるのです。エレミヤは雲であり、
バルクは雲でした。彼らは互いに対話しており、
エレミヤの言葉とバルクの言葉から稲妻がやっ
てきました。このようにして、もしあなたがで
きるなら、稲妻がどんなやり方でやってくるか
を、聖書から集めてみてください。また新約聖
書においては、パウロとシルワノが二つの雲で
した。彼らは一緒にやってきて、そして手紙と
いう稲妻が生じました。

したがって、神は「雨のために稲妻を作り、
彼の倉から風を導き出した」(詩134 [135]:7、
エレ10:13も参照)。ではこれらの風は倉の中
にあったということでしょうか。あるいは、地上
を吹いているこれらのもの〔風〕の本質がどん
なやり方で支えられているのかは明らかにされ
ないというのでしょうか。しかし、風の倉、霊
の倉のようなものがあります。「知恵と理解の
霊、意志と強さの霊、知識と敬虔の霊、神の畏
怖の霊」(イザ11:2以下)、「力と愛と思慮の霊」
(Ⅱテモ 1:7)。そしてあなたは自分で聖書から
これらの風を集めることができます。これらの
霊は倉の中にあります。倉とは何でしょうか。
「彼の中には、知恵と知識の宝〔倉〕が隠されて
いる」(コロ 2:3)。これらの倉はキリストの中
にあります。したがって、そこからこれらの風

とても硬い火打石のようなものです。またそれ
ゆえに、稲妻と同時に雷鳴も轟きます。雷鳴は
明らかにぶつかった音を示し、また稲妻は光の
明るさを放つのです。

(ラテン語訳)

もしあなたが〔上記の〕具体例を理解したなら、今度は理性的な雲を考えてください。モー
セは雲であり、ナウエ〔ヌン〕の〔子である〕
ヨシュアは雲でした。彼らが互いに話すと、彼
らの言葉から稲妻が光るのです。エレミヤとバ
ルクは雲でした。彼らは互いに対話しており、
あなたがたは稲妻が赤く輝くのを見るでしょう。
あなたも自分で聖書から、このようなやり方で、
そこから火が放たれるようなぶつかりを見つけ
ることができます。また新約聖書において私た
ちが見出すように、二つの雲としてのパウロと
シルワノが一つに調和しており、そして見よ、
彼らの手紙はこの世全体を稲妻で照らしたので
す。

「彼は雨のために稲妻を作り、彼の倉から風を
導き出した」(詩134 [135]:7、エレ10:13も参
照)。では、地上を吹いているこれらの風は神の
倉の中にあったということでしょうか。そして
これらのもの〔風〕の本質がどのように、また
どんな法則で存在しているのかは明らかでない
のでしょうか。しかし、風の倉、霊の倉のよう
なものがあります。「知恵と理解の霊、思慮と強
さの霊、知識と敬虔の霊、神の畏怖の霊」(イザ
11:2以下)、「力と愛と恵みの〔霊〕」(Ⅱテモ 1:
7)。そしてあなたは自分で聖書からこれらの
風を集めることができますし、これらの霊の倉
を見つけることができます。これらの倉はどこ
にあるのでしょうか。確かに彼の中に〔ありま
す〕、「彼の中には、知識の宝〔倉〕が隠されて
いる」(コロ 2:3)。それらはキリストの中に在

が、これらの霊がやって来るのです。それは、ある者が賢くなり、ある者が信心深くなり、ある者が知識を持ち、またある者が神の何らかの賜物を受け取ることができるためです。「というのも、ある人には霊を通じて知恵の言葉が与えられ、別の人には同じ霊に従って知識の言葉が〔与えられ〕、他の人には同じ霊において信仰が〔与えられる〕」（Ⅰコリ12:8以下）。

第6節

（ギリシア語）

こうして、「彼は地の果てから雲を上らせ、雨のために稲妻を作り、彼の倉から風を導き出した」（詩134 [135]:7、エレ10:13も参照）。そして私たちはといえば、神を通じてこれらの倉に届くように望んでいます。またたくさんの倉のようなものがある〈ので〉、おそらく、復活者たちの順序に従って、神の倉の中での休息があることでしょう。しかし、私が言っているのはこういうことです。すなわち、死者たちの復活は何らかの順序で生じるのです。というのも、使徒も「一人ひとり自分の順序で」（Ⅰコリ15:23）と言っています。そしてそれらの順序が偶然にかき乱されることはないので、ある順序は神のある倉の中にあり、またある順序は神の別の倉の中に、そして第三の別の順序は他の倉の中にあることでしょう。しかしながら、これらすべての倉は〔より大きな〕一つの倉を持っており、その中にそれら〔の倉〕は宿っています。それゆえに、パウロのもとで、「彼の中には、知恵と知識の宝〔倉〕が隠されている」（コロ2:3）と言われているのです。そして、私が多くの真珠を通じて「一つの高価な真珠を」（マタ13:46）手に入れるように、私は倉の中の倉、主の中の主、王の中の王（黙17:14, 19:16）のところにやってきました、私が神の倉からの霊に相応しくなったときに。というのも、「彼は彼の倉から風を導き出した」（詩134 [135]:7）からです。

処を持っています。そこからこれらの霊が生じるのです。それは、ある者が賢くなり、ある者が信心深くなり、ある者が博識になり、またある者が神の何らかの賜物を受け取ることができるためです。「というのも、ある人には霊を通じて知恵の言葉が与えられ、別の人には同じ霊に従って知識の言葉が〔与えられ〕、またある人には同じ霊において信仰が〔与えられる〕」（Ⅰコリ12:8以下）。

（ラテン語訳）

こうして、「彼は地の果てから雲を導き出し、雨のために稲妻を作り、彼の倉から風を導き出した」（詩134 [135]:7、エレ10:13も参照）。そして私たちはといえば、神の憐れみを通じてこれらの倉に届くように望んでいます。またたくさんの倉があるので、おそらく、復活者たちの順序に従って、神の倉の中での休息もまたあることでしょう。しかし、私が言っているのはこういうことです。すなわち、死者たちの復活は何らかの順序で生じるのです。というのも、使徒も「一人ひとり自分の順序で」（Ⅰコリ15:23）復活するのだと言っています。そして復活者たちの順序が好き放題にかき乱されることはありません。ある順序は神のこれこれの倉の中にあり、また別の順序は神のあれやこれやの倉の中にあることでしょう。これらすべての倉は一つの倉を持っており、「その中には、知恵と知識の宝〔倉〕が隠されている」（コロ2:3）のです。そして、私が多くの他の真珠を通じて「一つの高価な真珠を」（マタ13:46）手に入れるように、私は倉の中の倉、主の中の主、王の中の王（黙17:14, 19:16）のところにやってきました、私が神の倉に宿る霊に相応しくなったであろうときに。というのも、「彼は彼の倉から風を導き出した」（詩134 [135]:7）からです。

第7節

(ギリシア語)

「すべての人は知識から愚かにされた」(エレ10:14)。もしすべての人が知識から愚かにされたなら、そしてパウロが人であるなら、パウロは知識から愚かにされたのです。なぜなら、彼は部分的に知り、部分的に預言するからです(Ⅰコリ13:9)。また彼は知識から愚かにされました。なぜなら、彼は鏡を通じて見たり、謎によって見たり(Ⅰコリ13:12)、物事のごく小さな部分や——もしそう言ってもよいなら——限りなく小さな部分を見たり理解したりしている[ただけ]からです。一方で、逆[の観点]から、「すべての人は知識から愚かにされた」(エレ10:14)ことを、あなたは理解することができます。エルサレムの罪があり、ソドムの罪もありますが、エルサレムのより悪い罪と比較すると、ソドムの罪は[むしろ]正義です。というのも、彼曰く、ソドムはあなたのゆえに正義とされたからです(エゼ16:51, 53)。したがって、ソドムの罪は[真の]正義ではなく不義ではありますが、より多くの不義に比べれば[むしろ]正義であるように、逆から[言えば]、知識、パウロにある知識は、天にあるあの知識と比べれば、完全な知識と比べれば、[むしろ]愚かさなのです。このことゆえに、「すべての人は知識から愚かにされた」(エレ10:14)のです。私が思うに、何かこのようなことを伝道者は理解しつつ、次のように言いました。「私は言った、『賢くなろう』と。しかしそれ[知恵]は私から遠くされた、かつてそうであったよりも遠くへ。そして深みは深かった。誰がそれを見つけるだろうか」(コヘ7:23以下)。

第8節

(ギリシア語)

御言葉「ロゴス」は次のようなことを言うこととしてしています。すなわち、生に宿ったものが自分自身を空虚にしたが(フィリ2:7)、それは自分が空虚になることでこの世が満たさ

(ラテン語訳)

「すべての人は知識から愚かにされた」(エレ10:14)。もしすべての人が知識から愚かにされたなら、そしてパウロが人であるなら、パウロは知識から愚かにされたのです。「私たちは部分的に知り、部分的に預言する」(Ⅰコリ13:9)。また彼は知識から愚かにされました。なぜなら、彼は鏡を通じて見たり、謎によって見たり(Ⅰコリ13:12)、何らかの非常に小さな物事を見たり、もしそう言うことが有益であるなら、その非常に小さな物事自体の最も小さな部分をも理解したりしている[ただけ]からです。一方で、逆[の観点]から、なぜ「すべての人が知識から愚かにされた」(エレ10:14)のかを、あなたは理解することができます。エルサレムの罪と比較すると、ソドムの罪は[むしろ]正義です。というのも、彼曰く、ソドムはあなたのゆえに正義とされたからです(エゼ16:51, 53)。したがって、ソドムの罪はそれ自体では正義を持っていませんが、より大きな悪行に比べれば正当化されるように、逆から[言えば]、パウロの知識は、天にあるあの知識と比べれば、完全なあの理解と比べれば、[むしろ]愚かさと考えられるのです。このことゆえに、「すべての人は知識から愚かにされた」(エレ10:14)のです。私が思うに、何かこのようなことを伝道者は理解しつつ、次のように言いました。「私は言った、『賢くなろう』と。しかしそれ[知恵]は私から自身を遠ざけた、かつてそうであったよりも遠くへ。おお、深遠なる深みよ、誰がそれを見つけるだろうか」(コヘ7:23以下)。

(ラテン語訳)

私たちは、もし許されるなら、次のようなことを大胆にも言いたいのです。すなわち、この世に下ったものが自分自身を空虚にしたが(フィリ2:7)、それは自分が空虚になることで

れるためである、と。もし生に宿ったかのものが〈自らを〉空虚にするなら、その空虚そのものは知恵なのでした。「なぜなら、神の愚かさは人よりも賢いからである」(Ⅰコリ 1:25)。もし私が「神の愚かさ」を語ったなら、あら探しをする者どもはどのように私を呼んだ〈訴えた〉でしょう。どのように私を非難したでしょう。彼らによっても善いと見なされる諸々のことは何千回も語られたのに、彼らが善くないと思うこの一つのことが語られたとすると、どのように私は糾弾されたでしょう、私が神の愚かさを語ったという理由で。しかし、今やパウロは賢者として、また使徒的権威を持つ者として、あえて次のように語ったのです。すなわち、地上のあらゆる知恵、そして自分自身やペトロや使徒たちの中にある〔知恵〕、この世に宿ったあらゆる〔知恵〕とは、「神の愚かさ」に他ならない、と。というのも、地上に場所がないあの知恵についてと同じように、〔また〕超天界的、超現世的なあの知恵についてと同じように、〔この世に〕宿ったこれは、「神の愚かさ」なのです。しかし、この「神の愚かさは人よりも賢い」(Ⅰコリ 1:25)。では、どんな人よりも〔賢いの〕でしょうか。愚かな者たちよりだとは私は言いません。むしろそれ〔神の愚かさ〕は、賢者たちより賢くすらあるのです。たとえばあなたが、この今の世の賢者たち——支配者たちにせよ、この今の世の支配者たちの預言者たちにせよ(Ⅰコリ 2:6, 8)——のことを述べているのだとしても、私が物語った「神の愚かさは人よりも賢い」(Ⅰコリ 1:25)のです。

第9節

(ギリシア語)

御言葉〔ロゴス〕は何か逆説的なことを言おうとしています。すなわち、「この世の知恵は、神の前では愚かなものである」(Ⅰコリ 3:19)、そして「神はこの世の知恵を愚かなものにした」(Ⅰコリ 1:20)。彼〔神〕は〔自分の〕知恵によってこの世の知恵を愚かなものにしたので

この世が満たされるためである、と。もしこの世に下ったものが自らを空虚にするなら、その空虚そのものは知恵なのでした。「なぜなら、神の愚かさは人よりも賢いからである」(Ⅰコリ 1:25)。もし私が「神の愚かさ」を語ったなら、私の話のあら探しをする者どもは、また常に非難することに熱心な者どもは、どのように私に對する毒のある言葉を投げかけたでしょう。しかし、今やパウロは賢者として、また使徒的権威を持つ者として、あえて次のように語ったのです。すなわち、地上のあらゆる知恵は、それが自分自身の中にあるものであれ、ペトロの中にあるものであれ、他の使徒たちの中にあるものであれ、この世に下ったものであれ、「神の愚かしさ」に他ならない、と。というのも、地上の場所が持っていないあの知恵と比較して、〔また〕天的であり、この世の限界を超えているあの知恵と比べて、人間のもとに下ったこれは、「神の愚かさ」なのです。しかし、この「神の愚かさは人よりも賢い」(Ⅰコリ 1:25)。では、どんな人よりも〔賢いの〕でしょうか。少なくとも、愚かな者たちよりではなく、賢者たちより〔賢いの〕です。たとえばあなたが、今のこの世の賢者たち——支配者たちにせよ、預言者たちにせよ(Ⅰコリ 2:6, 8)——のことを、今のこの世の賢者たちに述べているのだとしても、私たちが語ったのはこのことです、「神の愚かさは人よりも賢い」(Ⅰコリ 1:25)。

(ラテン語訳)

私たちは何か不思議なことを加えよう〔接ぎ木しよう〕としています。すなわち、「この世の知恵は、神の前では愚かしさである」(Ⅰコリ 3:19)、そして「神はこの世の知恵を愚かなものにした」(Ⅰコリ 1:20)。彼〔神〕は、自分の知恵によってこの世の知恵を愚かなものにした

しょうか。またこの世の知恵は、愚かであることなどできるのでしょうか。はたして神の知恵は、この世の知恵に関連して非難されるために、それと競ったりするのでしょうか。むしろ、何かわずかなものが必要です、すなわち神のわずかな愚かさが。それは、神のこうした少しばかりの愚かさによって、この世の知恵が愚かなものとされ、非難されるためです。というのも、こうしたこの世の知恵は、神の知恵を運ぶことができなかつたからです。以上のようなことについて、例えば、「神の愚かさ」（Ⅰコリ 1:25）が「この世の知恵を愚かなものにした」（Ⅰコリ 1:20）ことをあなたが理解するために、誰か無知で、無教養で、何も理解せず、何かしら高尚な問題について競ったことのない者と、私が——私は多くのことや、非常に多くのことを知っていると思われていますので——競うことを〔試しに〕許してみてください。こうした者に対して、私は弁証術や非常に深遠な定理を必要とするのでしょうか、もし彼の理解が愚かなものであるなら。彼の愚かさを非難することができるように、私にとって必要なのは、彼の言説よりもわずかに鋭い一つの小さな言葉ではないでしょうか。同様に、こうしたこの世の知恵が愚かなものと示されるためには、それと競う神の知恵は必要ではなく——というのも、それ〔この世の知恵〕はより劣っているからです——、むしろ「神の愚かさ」で事足りています。なぜなら、「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」（Ⅰコリ 1:25）からです。そして私の救い主にして主は、まったく反対のものを取り上げましたが、それは彼が反対のものによって反対のものを解決するためです。ですから、私たちとしましては、イエスの弱さから強くされ、神の愚かさから賢くされ、そしてこれらのことに導かれた後で、知恵へと、神の強さへと、キリスト・イエス——「この御方に栄光と支配が永遠にある」（Ⅰペト 4:11）——へと、上ることができるようになります。アーメン。

のではありません。彼〔神〕は、この世の知恵を受け入れられないのです。そのため、それ〔この世の知恵〕は愚かしさであると明らかにされています。というのも、神の知恵は、この世の知恵を完全に打ち負かすために下ろうとしてくださったのではなく、むしろ、何かわずかなもの——それは受肉の秘跡のことです——が必要でした、すなわち神の愚かさが。それは、神のこうしたわずかで愚かなことによって、今のこの世の知恵が愚かなものとされるためです。というのも、今のこの世の知恵は、自らへとやってくる〔神の〕知恵の偉大さを支えることができなかつたからです。では、例を引いてみましょう、そうすれば、はっきりと、どのように「神の愚かさ」（Ⅰコリ 1:25）が「この世の知恵を愚かしくした」（Ⅰコリ 1:20）のかが理解されます。〔例えば、〕何も理解せず、鋭い議論を何も尋ねないような、無知で無教養な誰かと、私が——私はひとかどのものであると思われていますので——言葉を交わすことを、しばらくの間、〔試しに〕私に想像させてください。こうした者の愚かしさを非難するために、弁証術的な巧妙さや深い感覚の洞察力を利用することが、果たして私に必要でしょうか。普通でありふれた、しかしこうした者の理解力にとっては最も鋭いと思われる、一つの小さな言葉を投げかけることによって、私は彼が愚かで無知であることを立証することができるのではないのでしょうか。したがって、同じように、この世の知恵を愚かしいものとするために、神の知恵が下ったり、知恵としてより劣っているそれ〔この世の知恵〕と格闘したりする必要はありません。むしろ「神の愚かさ」で事足りています。なぜなら、「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」（Ⅰコリ 1:25）からです。そして私の救い主にして主は、まったく反対のものを取り上げましたが、それは彼が反対のものによって反対のものを解決するためです。ですから、私たちとしましては、イエスの弱さから強くされ、彼の愚かさから賢くされ、そしてこれらの

ことに導かれた後で、知恵へと、神の強さへと、
私たちの主であるキリスト・イエス——「この
御方に栄光と支配が永遠のうちの永遠の中にあ
る」（Ⅰペト 4:11）——へと、上ることができ
るようになりましょう。アーメン。

注

- 1 Theodore A. Bergren with Robert A. Kraft and Benjamin G. Wright III, “Jerome’s Translation of Origen’s Homily on Jeremiah 2.21-22 (Greek Homily 2; Latin 13),” *Revue Bénédictine* 104 (1994): 260-83, esp. 265-67.